石川県埋蔵文化財情報

第 24 号

巻頭図版（大泊Ａ遺跡、丸の内７番遺跡、宮保館跡）

平成21年度の発掘調査から ……所長　三浦　純夫…（１）

発掘調査略報

大泊Ａ遺跡（七尾市）……（３）
七尾城跡（七尾市）……（５）
加茂遺跡（津幡町）……（７）
南新保Ｅ遺跡（金沢市）……（９）
丸の内７番遺跡（金沢市）……(11)
神田遺跡（金沢市）……(13)
八日市Ｄ遺跡（金沢市）……(15)
二日市イシバチ遺跡（野々市町）……(17)
横江Ｄ遺跡（白山市）……(18)
五歩市遺跡（海側幹線・白山市）……(20)
五歩市遺跡（北陸新幹線関連・白山市）……(22)
松任城跡（白山市）……(24)
高見遺跡（白山市）……(26)
北出遺跡（白山市）……(29)
宮保館跡・宮保Ｂ遺跡（白山市）……(31)

平成21年度下半期の出土品整理作業 ……(33)

調査研究

掘立柱建物の平面設計について―石川県内の古代遺跡例から― ……浜崎悟司…(36)

2010年９月

財団法人　石川県埋蔵文化財センター

写真解説

大泊Ａ遺跡

Ｈ区（第１面）完掘状況（北から）

写真左側、調査区壁から約12m 東に現在の海岸線が位置する。第１面では掘立柱建物のほか製塩土器が多量に混入した土坑や溝が検出されるなど、当時の盛んな土器製塩の様子が窺われた。第２面では、製塩土器を伴う古墳時代の竪穴建物が確認されている。

Ｈ区（第２面）カマド状遺構及び同遺物出土状況（北から）

古墳時代のカマド状遺構である。内部からほぼ形状を保った棒状脚の製塩土器１個体が出土した。出土遺物からその可能性は指摘されていたが、これにより、本遺跡における製塩活動が古墳時代に遡ることが明らかとなった。

H区（第1面）完掘状況（北から）

H区（第2面）カマド状遺構及び同遺物出土状況（北から）

写真解説

丸の内７番遺跡

上層遺構完掘状況遠景（北東から）

金沢城跡白鳥堀東側の金沢地方・家庭裁判所敷地内に位置する城下町遺跡であり、敷地内には17世紀中頃、加賀藩の公事場や武家屋敷が置かれていた。調査の結果、石組井戸や石敷遺構、廃棄用の土坑、石組の水路状遺構、溝などが見つかり、土師器皿や陶磁器をはじめ、瓦、砥石、石臼、銅銭、煙管、鉄滓、漆器椀、曲物、箸、下駄など、17世紀中頃～18世紀後半を中心とした遺物が多く出土した。

宮保館跡

堀の完掘状況（東から）

コの字状に巡る堀を検出した。幅約4.5～５m、深さ約0.8～１mの内幅約40mの方形区画の南端部にあたる。遺物から15世紀前半頃に掘られたと考えらえる。東辺部は掘り直しが行われており、堀は15世紀後半まで存続したと思われる。

丸の内７番遺跡　上層遺構完掘状況遠景（北東から）

宮保館跡　堀の完掘状況（東から）

平成21年度の発掘調査から

所　長　　三浦　純夫

平成21年度は、石川県教育委員会から15件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの件数は、国土交通省が３件、鉄道・運輸支援機構が11件、最高裁判所が１件、県土木部が５件、県立中央病院が１件である。

本号では、平成21年度に石川県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査の概要を報告し（前号で報告した遺跡は除く）、あわせて石川県金沢城調査研究所および市町の発掘調査概要も紹介する。

１　石川県埋蔵文化財センターが実施した調査

大泊Ａ遺跡（七尾市）は弥生時代、古代・中世の集落および古墳時代・古代の製塩遺跡である。古墳時代では２基の竪穴建物と製塩土器が入った「カマド状遺構」を確認した。

七尾城跡（七尾市）の発掘調査は５年目である。城下町部分の調査であり、庄津川の西で掘立柱建物、井戸、大溝を検出した。大溝は幅４ｍで、城下を区画する溝の可能性がある。このほか石組井戸から円面硯が出土している。

河北縦断道路建設にともなう加茂遺跡（津幡町）の調査では弥生時代と中世の集落を確認した。弥生時代では、平地建物、河道を検出し、河道のそばでトチ種子の集中箇所を確認した。これはトチの処理・加工を行った「水場遺構」と推定される。

南新保Ｅ遺跡（金沢市）は弥生時代、平安時代の集落である。平安時代の井戸から斎串が１点出土した。

丸の内７番遺跡（金沢市）は加賀藩の公事場（裁判所）・武家地にあたる場所である。今次の調査箇所は武家地の庭にあたると見られ、石組みの水路、大型土坑、石敷遺構などを確認した。

神田遺跡（金沢市）は、弥生・古墳時代の集落で、竪穴建物を検出した。

八日市Ｄ遺跡（金沢市）では奈良・平安時代の集落を確認した。奈良時代は竪穴建物、平安時代になると掘立柱建物へと変化している。

二日市イシバチ遺跡（野々市町）では弥生時代と中世の集落を調査した。

横江Ｄ遺跡（白山市）は弥生時代と中世の集落で、弥生時代は後期後半の竪穴建物、中世は末期の掘立柱建物を検出した。

五歩市遺跡（白山市）では海側幹線と北陸新幹線建設にともなう発掘調査を行った。海側幹線関係調査では、弥生時代、中世の集落を確認した。弥生時代は玉生産を行ったと見られる後期の竪穴建物を検出した。北陸新幹線関連調査でも玉生産に係る竪穴建物を検出した。

高見遺跡（白山市）では弥生時代、奈良・平安～中世の集落を確認した。奈良時代では、11基の竪穴建物を発掘した。これは、一辺２～４ｍと小型で、平面の基本形は方形である。カマドや煙道が良好に遺存していた。中世は室町時代の竪穴状遺構、掘立柱建物、区画溝などを検出した。

北出遺跡（白山市）は中世の集落で、掘立柱建物、竪穴状遺構、井戸などを検出した。

宮保館跡・宮保Ｂ遺跡（白山市）では堀に囲まれた館とその周囲に展開する建物群を検出した。時期は12世紀から16世紀であるが、盛期は15世紀にある。堀からはこけら経が出土した。また、堀の外で造られた墓坑から烏帽子が出土した。

2　石川県金沢城調査研究所が実施した調査

金沢城調査研究所は、金沢城玉泉院丸跡で泉水遺構の調査を行い、池底、石垣、中島、出島などの遺構を確認した。出島では、もとの位置にある大型の「景石」を検出した。また、泉水の下部を確認した結果、作庭以前は堀があったことが判明した。このほか、金沢城いもり堀で鯉喉櫓台石垣の復元整備にともなう調査を行い、兼六園栄螺山で修理にともなう調査を行った。

3　市町が実施した調査

能登町は、真脇遺跡で史跡整備にともなう調査を行い、縄文時代晩期の環状大溝を確認した。大溝からは御物石器、石冠、石刀、櫛などが出土した。また、松波城跡庭園では、庭園が造られている平坦面の確認調査を行い、礎石建物を確認した。

七尾市は、花園上田遺跡で古代の集落を調査し、掘立柱建物、柵列を検出した。七尾城跡では総構堀の一部を確認した。

津幡町は、加茂遺跡の確認調査を行った。平成13年度以降９年目である。舟橋川北側で掘立柱建物、畝溝を検出した。出土遺物には円面硯、墨書土器などがある。

金沢市は、金沢副都心直江土地区画整理事業にともなう直江遺跡群の継続調査を行った。直江遺跡群は直江町地内に所在する直江北遺跡ほか５遺跡の総称で、縄文時代から中世まで続く複合遺跡である。直江北遺跡では「諸刀自女」と書かれた墨書土器や中世の烏帽子、呪符木簡が出ている。このほか、西外総構跡、涌波遺跡（土清水煙硝蔵跡）の確認調査を行った。涌波遺跡は３年目の調査で、黒色火薬製造施設の調査を行い、火薬原料の加工施設である「搗蔵」跡と道路を検出した。

野々市町は、二日市イシバチ遺跡で、勾玉・管玉の未成品が出た玉造り関係の竪穴建物を検出した。郷クボタ遺跡では弥生時代、古代・中世の集落を確認し、竪穴建物、掘立柱建物を検出した。徳用クヤダ遺跡では古代・中世の集落を発掘した。古代は平安時代の掘立柱建物、中世は溝で区画された屋敷地のほか道路も検出した。郷クボタ遺跡では弥生時代、平安時代、中世の集落を調査し、９世紀代の大規模な掘立柱建物が等間隔に配置されていることを確認した。古代北陸道が近くを通っていると想定され、公的な性格をもった建物と見られている。

白山市は、横江荘遺跡「回廊状大型区画施設」の確認調査を行い、その規模は東西54m、南北50mで、主殿となる建物は東西棟であると推定した。二曲城跡では、郭の確認調査を実施した。また、白山山頂遺跡群では、加賀禅頂道と越前禅頂道の測量調査を行った。

能美市は、西山古墳群の確認調査を行い、直径12～15mの円墳を新たに４基発見した。

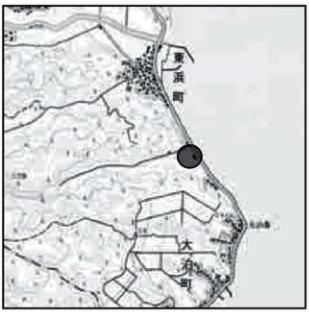
小松市は、漆町遺跡、薬師遺跡、二ッ梨豆岡山古窯跡群、松谷寺遺跡、小松城跡の調査を行った。薬師遺跡は月津台地の古代集落で、竪穴住居、掘立柱建物などを検出した。二ッ梨豆岡山古窯跡群では９・10世紀の須恵器窯４基を調査し、焼成部境の絞り口が完全に残っている窯を確認した。小松城跡では、三ノ丸の護岸石垣を検出した。

加賀市は、九谷磁器窯跡の整備にともなう調査を行った。吉田屋窯跡の工房範囲の確認調査である。

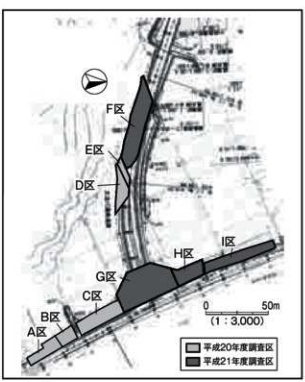
大泊（おおとまり）A遺跡

所 在 地　七尾市大泊町地内　　調査期間　平成21年４月16日～同年11月６日

調査面積　3,350㎡　　調査担当　金山哲哉　空　良寛



遺跡位置図（S＝１／25,000）



調査区配置図（S＝１／3,000）

調査成果の要点

- 山側調査区では古代～中世の集落の縁辺部を、海側調査区では弥生時代の集落跡と、古墳～奈良・平安時代の製塩遺跡を確認した。
- 海側調査区では炉跡はみられなかったが、掘立柱建物や須恵器杯など、製塩活動に関連するとみられる遺構や遺物を多数確認した。

大泊Ａ遺跡は、七尾市の南東端、富山県氷見市と市境を接した七尾市大泊町地内に所在する。一帯は石動山系低丘陵と日本海が近接する平地の少ない地域で、当遺跡は鮭谷川河口部南側に形成された僅かな平地部分に立地する。

発掘調査は、一般国道470号能越自動車道（七尾氷見道路）建設に伴い、平成20年度から実施している。第２次となる今回の調査は3,350㎡を対象に、山側と海側の２地点で行った。

山側調査区（Ｆ区）では、山裾の緩斜面で大小土坑数基を確認したのみであり、その密度から集落の縁辺部と判断された。遺物は若干の製塩土器を含む、古代～中世にかけての資料が少量出土した。製塩土器は主に土坑を検出した調査区中央付近で出土しており、いずれも棒状脚タイプとみられる。一方、調査区西端の鞍部からは海側調査区でも極めて稀な平底タイプの製塩土器が出土しており、海側区域との関係が注目される。

対する海側調査区のＧ･Ｈ･Ｉ区では、奈良・平安時代の製塩遺跡を主体として、弥生～奈良・平安時代にかけての遺構を確認した。奈良・平安時代の面には、Ｉ･Ｈ区を中心に大量の製塩土器細片を含む濃密な遺物包含層が広がっていた。包含層中には被熱した礫石や珪藻土ブロックが散見されたが、第１次の海側調査区でみられたような製塩炉は今回の調査では検出されなかった。その反面、同区域では掘立柱建物や須恵器杯など、第１次の海側調査区では殆どみられなかった遺構・遺物が多数確認されている。炉跡が削平されていないとは言い切れないが、今回の海側調査区については製塩作

業の場に近接するも、中心はその作業関連の建物が位置する区域であったと考えておきたい。

なお、今回とくに注目されたのは、竪穴建物２基ほかを検出した古墳時代の遺構である。中でも、Ｈ区で確認されたカマド状遺構の検出状況が良好であり、内部からはほぼ形状を保った棒状脚の製塩土器１個体が出土した。このカマド状遺構については焼塩に使用したものとも考えられるが、これにより本遺跡での製塩活動が古墳時代に遡ることが明らかとなった。

その他、Ｇ区では遺構は確認できなかったものの、縄文中期中葉～後期前葉の土器が少量出土している。周知の遺跡ではないが、北西側近接地の宅地法面に縄文時代中期の遺物包含層が露出しており、これらの資料は当該区域から流入したものと推察される。また密度は著しく低いが、Ｉ区南半からＧ区北半部の範囲で弥生時代後期末の遺物を伴う土坑数基を検出した。製塩土器の出土は認められなかったが、直上で検出した古墳時代の製塩遺跡に繋がる集落跡の存在が想定される。

次年度も継続調査の予定であり、今後更に本遺跡の詳細が明らかになるものと期待される。

（金山哲哉）

調査区全景（南東から）

Ｇ区遺構完掘状況（南東から）

Ｇ区弥生時代土坑遺物出土状況（北から）

Ｉ区第１面遺構完掘状況（南から）

Ｈ区第１面遺構完掘状況（北から）

Ｈ区第２面古墳時代カマド状遺構内遺物出土状況（北から）

七尾城跡（ななおじょう）

所 在 地　七尾市小池川原町地内　　調査期間　平成21年９月15日～同年12月25日

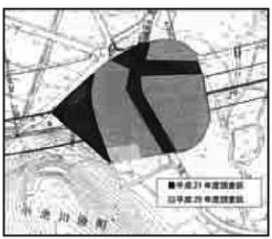
調査面積　1,800㎡　　調査担当　谷内明央、空　良寛

遺跡の位置（S＝１／25,000）

調査成果の要点

・中世・近世の集落跡。

・16世紀以降とみられる掘立柱建物、石組みの井戸、南北方向に伸びる大溝などを検出し、土師器、珠洲、越前、瀬戸・美濃、肥前、越中瀬戸、中国産磁器、硯、銅銭などが出土した。



調査区の位置（S＝１／2,500）

一般国道470号能越自動車道建設（七尾氷見道路）に伴う七尾城跡の発掘調査は平成17年度に着手し、今回で５年目の調査となる。平成17～19年度調査では木落川と庄津川にはさまれた範囲を調査し、城の防御となる総構や本丸へ向かう大手道、鍛冶・染物などを扱う商工業者の町屋や家臣団の屋敷などが確認されている。また、庄津川の西側に位置する平成20年度の調査では、掘立柱建物や石組み井戸、竪穴状遺構などを検出し、土師器、珠洲、越前、瀬戸・美濃、備前、肥前、越中瀬戸、中国産磁器、石臼、硯、漆器、鍛冶滓、銅銭など主に16世紀～17世紀前半の遺物が出土した。

今回の調査は昨年度の調査区に隣接する箇所を対象としている。昨年度の成果を合わせて掘立柱建物32棟、井戸27基を検出した。掘立柱建物は側柱構造が主体である。北東―南西方向に軸を持つ建物が多く、複数の箇所で建て替えを確認できた。柱穴の平面形は円形と楕円形のものがあり、柱痕跡がほぼ柱の掘方になるような小さな柱穴も目立つ。井戸は１基を除いて全て石組みのものであり、深さ1.5mほどのものが多い。井戸からは主に16世紀～17世紀前半の遺物が出土している。

今回の調査で注目されるのは、調査区の西側を走る幅３～４m、深さ１mの大溝で、延長50m以上を確認した。大溝東側の土層断面で盛土を施した土手状の痕跡、大溝西側には整地の痕跡が認められた。また、石組み井戸の一つから中国製と思われる硯（円面硯）が出土しており、七尾城に関係する上級武士や僧侶階級の存在を想定できる。庄津川から西の七尾城下の広がりを確認できたことは今回の大きな調査成果といえる。　（谷内明央）

井　戸

掘立柱建物

大　溝

0　(1:600)　30m

平成20年度調査区との合成図

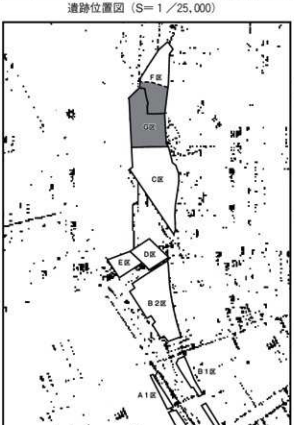
SE26（北西から）

硯出土状況（北西から）

加茂遺跡

所 在 地　河北郡津幡町加茂地内
調査面積　2,500㎡
調査期間　平成21年7月6日～平成22年1月27日
調査担当　土屋宣雄　林　大智　荒木麻理子

遺跡位置図（S＝1／25,000）



調査区位置図（S＝1／2,500）

調査成果の要点

- 加茂遺跡の北東域にあたる2か所の調査区を対象に調査を実施し、主に弥生時代と中世の集落跡を確認した。
- 県内では類例の少ない弥生時代前期末～中期前半頃の平地建物や掘立柱建物などで構成された集落跡を検出した。
- トチノキ種子の処理・加工施設と考えられる弥生時代の「水場遺構」を検出した。

加茂遺跡は、県内随一の潟湖であった河北潟東岸に広がる沖積低地から丘陵端部に立地している。

発掘調査は、主要地方道高松津幡線（河北縦断道路）建築工事を原因とし、平成17年度から継続して調査を実施してきた結果、弥生時代から近世まで断続的ながら長期間営まれた集落跡を確認している。

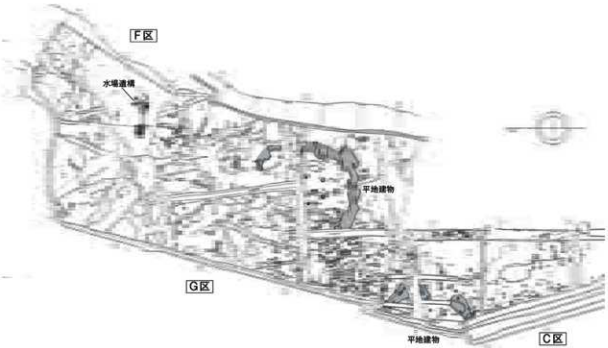
平成21年度は、F区南半部とG区の調査を行い、主に弥生時代と中世の集落跡を検出した。

中世の集落跡（G区1面）は、掘立柱建物3棟、井戸4基などで構成され、集落域の南側を東西方向の区画溝、北側を河道で挟まれた範囲に展開する。

掘立柱建物は調査区南寄りに小規模な総柱建物が群集しており、それらを取り囲むように井戸が設置されている。井戸は素掘りのものを主体とするが、井戸枠に2段組みの曲物を用いたものも認められ、枠内からは珠洲焼や漆器碗などが出土した。

弥生時代の集落跡（G区3面）では、調査区南側に平地建物1棟を確認した。平地建物は平面が隅丸方形を呈する外周溝を巡らし、建物の外周溝や隣接する落ち込みからは、前期末～中期前半頃の条痕文土器が多く出土している。同様の建物は平成18年度に調査を実施したC区北端で検出されており、さらに平地建物の周辺には、密集する柱穴群が確認されていることから、数棟の平地建物と掘立柱建物主体で構成された居住域の存在を想定できる。

なお、F区及びG区北端で検出した河道下部からは、樹木枝材を規則的に配置した木組み施設を検出した。周囲には、条痕文土器と共にトチノキ種子集中箇所などが確認されることから、この施設の周辺がトチノキの処理・加工を行った弥生時代の「水場遺構」であった可能性が高い。　（林　大智）

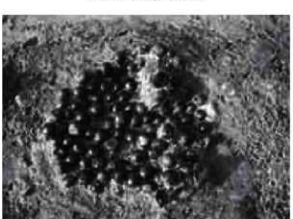


F区２面・G区３面・C区（一部）遺構合成図〔S＝１／400〕

G区１面井戸枠検出状況（東から）

G区３面遺構完掘状況

F･G区河跡水場遺構調査状況（東から）



F区河跡トチノキ種子集中箇所

南新保（みなみしんぼ）E 遺跡

所 在 地　金沢市鞍月東２丁目地内　　調査期間　平成21年10月28日～同年12月11日
調査面積　730㎡　　調査担当　松山和彦　　稲葉浩一

遺跡位置図（S＝１／25,000）

調査成果の要点

・弥生時代中期の川跡１条を検出し、土器や、石鏃・打製石斧などの遺物を確認した。
・平安時代前期の、曲物を井戸枠とする井戸１基を検出し、斎串などの出土を確認した。

南新保Ｅ遺跡は、石川県立中央病院の北側に広がる、弥生時代～中世の集落跡で、金沢西部地区土地区画整理事業に伴い、石川県立埋蔵文化財センターが平成７・８年度に発掘調査を実施している。

今回の調査は石川県立中央病院がん治療施設整備工事に係るものであり、調査地点は既往の調査地点の南側にあたる。検出した主な遺構は「調査成果の要点」で紹介したとおりである。

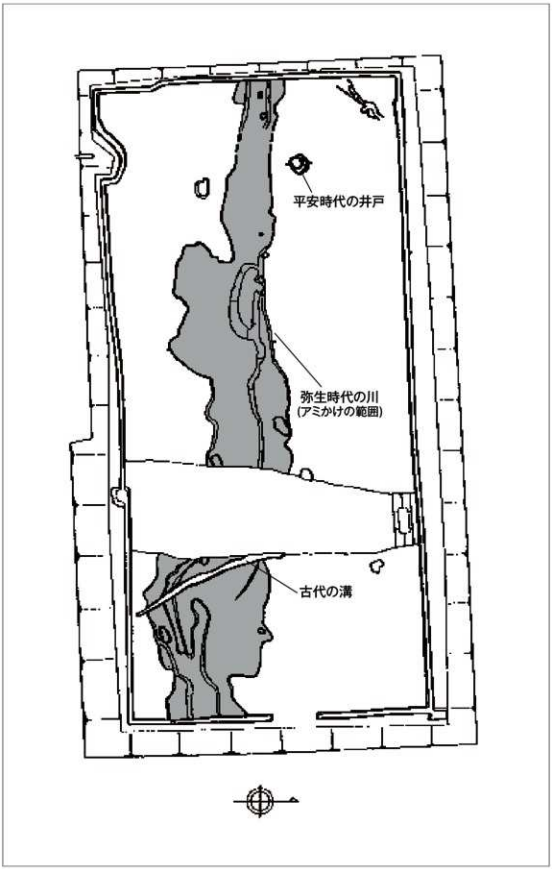
弥生時代中期の川跡は、蛇行しながら東から西に流れ、幅は５ｍ程である。近代の耕地整理の際に上部が削平されているようで、検出面からの深さが10cm 未満の部分が多く、流水に伴う粗砂など元来、下層を構成していた土層のみが遺存する状況がみられた。

平安時代前期の井戸は、一辺が90cm 前後の隅丸方形の掘り方を有し、直径約60cm の曲物を井戸枠とする。検出面からの深さは90cm 程である。曲物は検出面より下、30～65cm の位置に１段分が残っていたが、土圧や腐食の影響で大きく歪み、亀裂が縦横に走るなど、遺存状態は良くなかった。また、底部付近からは斎串が１点出土しているが、底面そのものは不透水層である粘土層中に設けられており、あるいは水溜め的な性格が想定できるのかもしれない。

その他にも、古代の溝や小穴が若干検出されている。　（松山和彦）

弥生時代の川跡（西から）

平安時代の井戸（西から）



遺構図(S=1/200)

丸の内7番遺跡

所 在 地　金沢市丸の内地内　　調査期間　平成21年10月６日～平成22年１月29日

調査面積　900㎡　　調査担当　安中哲徳　細山いづみ

遺跡位置図（S＝１／25,000）

調査成果の要点

- 金沢城跡白鳥堀東側の金沢地方・家庭裁判所敷地内で、加賀藩の公事場と北側に位置する武家屋敷を調査した。
- 複数の遺構面を確認し、石組水路や溝、廃棄用の大型土坑、石組井戸、石敷遺構等の遺構を確認した。
- 遺物は17世紀中頃～18世紀後半頃を中心とする土師器皿や瀬戸・美濃・肥前・唐津等の陶磁器、軒丸・軒平等の瓦、銅銭・煙管等の金属製品や鉄滓、漆器椀・箸・下駄等の木製品、石臼・碁石等の石製品が多く出土した。

遺跡は、金沢城跡白鳥堀東側の金沢地方・家庭・簡易裁判所敷地内に存在し、近世城下町に属する遺跡である。この地には万治２（1659）年頃、加賀藩の公事場（現在の裁判所）や武家屋敷が置かれたとされており、明治以降、金沢監獄署、裁判所と変遷したことがわかっている。

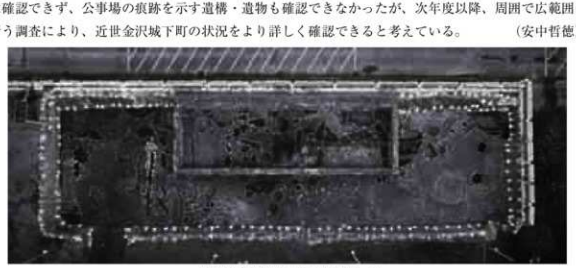
今回の調査区は、公事場と北側に位置する武家屋敷の一角に当たると考えられ、延宝金沢図や金沢城下絵図などの絵図には岡嶋備中や多賀典膳などの武士の名前が見られる。

今年度の調査は、裁判所裏庭の平面積600㎡を対象として行ったが、調査区北半は整地土層をはさみ、遺構面が３面以上あることが確認され、今年度は、上から２面のみを調査した。

遺構は、上層には、17世紀後半～19世紀前半頃の石組や素掘りの井戸、廃棄用の大型土坑、屋敷境の石組水路などを確認し、北半の下層には、17世紀前半～後半頃の水路や丸瓦を並べた溝、廃棄用の大型土坑、石組井戸、石敷遺構などを確認したが、礎石や根石などの建物跡は確認できなかった。

遺物は、17世紀中頃から18世紀後半頃を中心として、灯明皿として使われていた土師器皿や瀬戸・美濃・志野・肥前・唐津等の陶磁器をはじめ、焼塩壺、軒丸瓦や軒平瓦等の瓦、銅銭・煙管等の金属製品、鉄滓、漆器椀・曲物・箸・下駄等の木製品、砥石・石臼・碁石等の石製品が多く出土した。

調査の結果、絵図で公事場北側に書かれていた、白鳥堀から分岐して延びる水路や土居などの遺構は確認できず、公事場の痕跡を示す遺構・遺物も確認できなかったが、次年度以降、周囲で広範囲に行う調査により、近世金沢城下町の状況をより詳しく確認できると考えている。　（安中哲徳）



上層遺構完掘状況全景（上部西から）

上層遺構完掘状況遠景（北東から）

上層遺構完掘状況全景（北から）

上層石組井戸掘削作業（北から）

上層井戸群検出状況（北東から）

上層石組水路完掘状況（東から）

下層遺構完掘状況遠景（南東から）

下層丸瓦列検出状況（東から）

下層石敷遺構・廃棄用土坑検出状況（東から）

神田遺跡

所 在 地　金沢市神田２丁目地内　　調査期間　平成21年８月21日～同年10月27日
平成21年12月９日～平成22年１月21日

調査面積　1,520㎡　　調査担当　松山和彦　稲葉浩一

遺跡位置図（S＝１／25,000）

調査成果の要点

- 調査区南部で弥生時代終末頃の竪穴建物などを検出した。
- 調査区北部で古墳時代前期頃の竪穴建物などを検出した。
- 以上から地点を移しながら、弥生時代終末期から古墳時代前期頃まで、継続的に集落が営まれている状況が明らかとなった。

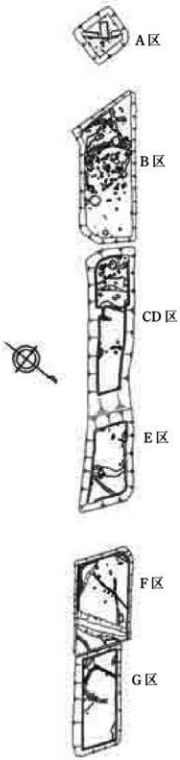
神田遺跡は金沢市街地を貫流する犀川の左岸に位置し、標高は10m前後である。今回の調査は北陸新幹線建設工事に係るもので、調査地はJR北陸線と県道が交差する神田陸橋西側の線路沿いである。

着手可能な箇所から順次、発掘を進めたが、調査区名については南西（西金沢駅寄り）から北東（金沢駅寄り）にかけてA～G区とした（次ページ参照）。A区では犀川の分流と考えられる河道が検出され、それが遺跡の南西を画するようである。続くB区では弥生時代終末頃の竪穴建物（円形の周溝の一部）や土坑などが検出された。CD区でもB区と同時期の土坑や溝が確認されたが、北東にいくにしたがって遺構の分布が希薄になり、E区でもその傾向は変わらない。

北東部のF･G区においては、古墳時代の遺物の出土がみられるようになる。F区では幅約４ｍの北北西に流れる大溝が検出され、下層からは古墳時代前期の土器が出土している。同じくF区南西隅では弧状（円形の一部か）の溝も検出され、そこからは古墳時代中期の須恵器杯身が出土している。G区では一辺が約６ｍの隅丸方形の竪穴建物（２本主柱か）の周溝と考えられる溝が検出され、出土遺物に恵まれないものの、古墳時代前期頃と推定される。（松山和彦）

A区完掘状況（南西から）

B区南部（南西から）



遺構図（S＝1／750）

CD 区完掘状況（南西から）

F 区完掘状況（北東から）

F 区 SD15須恵器出土状況

G 区完掘状況（南西から）

八日市（よう か いち）D遺跡

所在地　金沢市八日市一丁目　　調査期間　平成21年８月４日～同年10月19日

調査面積　1,250㎡　　調査担当　端　猛　荒川真希子

遺跡位置図（S＝１／25,000）

調査成果の要点

・奈良・平安時代の集落跡を確認した。
・主に８世紀前半の竪穴建物１棟と９世紀の掘立柱建物を10棟以上検出した。

八日市Ｄ遺跡は手取扇状地の扇央部に位置する。

調査原因は、北陸新幹線鉄道高架橋等建設に伴うものである。

調査区は道路や水路により３つに分かれ、金沢側から１、２、３区と呼称し、分けて調査した。

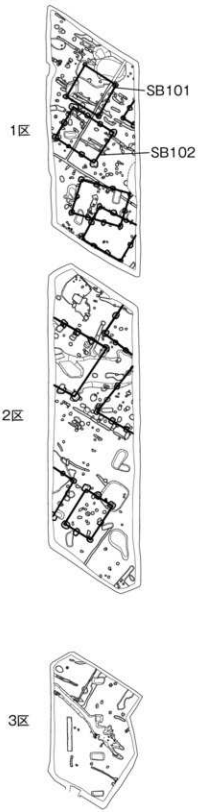
調査の結果、１、２区では竪穴建物や掘立柱建物を検出した。竪穴建物は８世紀前半と考えられ、10棟以上確認した掘立柱建物とは時期差がある。また、掘立柱建物には桁行きを南北に揃える一群とやや西方に振る一群が一部重なって検出されており、さらに時期差があると思われる。出土遺物の詳細な検討を行い建物の変遷を明らかにしていきたい。なお、２区より弥生時代の竪穴建物が１棟検出され、集落の成り立ちを考える上での資料も得られた。また、中世の遺構として、調査区を横断する溝と複数の掘立柱建物も検出しており、集落の変遷についても窺い知ることができた。３区では、小穴や溝を複数検出したものの出土遺構も少なく、遺跡の縁辺部に当たると思われる。

遺跡から出土した遺物は須恵器が多く、土師器、弥生土器、縄文土器、中世陶磁器、石製品などが出土した。

調査区位置図（S＝１／5,000）

周辺でも、土地区画整理事業等のため過去に多くの発掘調査が行われており、八日市ヤスマル遺跡、八日市サカイマツ遺跡、八日市Ｂ遺跡などは、古代に関しては８世紀～９世紀前半の年代をもつことなど本遺跡とも似通った点があることが知られている。また、北陸新幹線建設に伴う発掘調査が周辺で本遺跡も含め次年度以降も予定されている。これらを踏まえて周辺遺跡との関連性を念頭に本遺跡について今後検討していきたい。

（荒川真希子）



調査区全体図（S=1/500）

1区の調査状況（南西から）

SB101（南から）

SB102（南から）

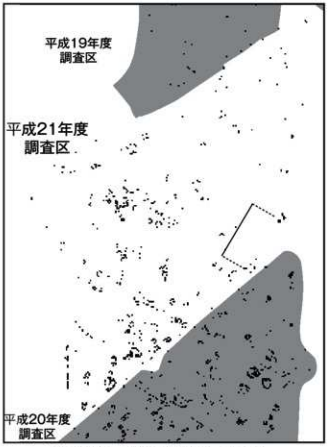
二日市（ふつか いち）イシバチ遺跡

所 在 地　野々市町北西部土地区画整理事業区域内
調査面積　240㎡

調査区位置図（S＝1／25,000）

調査期間　平成21年10月26日～同年11月16日
調査担当　白田義彦　大西　顕

本遺跡は、手取川扇状地上に位置し、礫層が検出面の一部に露出している。遺構検出面での標高は約14m を測る。今回の調査は北陸新幹線建設に伴うものである。調査区に隣接して平成19年度、平成20年度にも調査が行われている。旧耕土下には、約30cm程度で暗褐色土が広く堆積し、この下面で遺構が検出された。遺構は、弥生時代と中世のものが検出されている。調査区南側ほど遺構密度が高くなる。弥生時代では、南東から北西方向の溝と、ピット列（掘立柱建物の柱穴の可能性あり）が検出された。出土遺物は少ないが、弥生時代後期から終末期頃の遺構の可能性がある。中世では南北方向にのびる溝を検出した。　（大西　顕）



平成21年度　調査区全体図（S＝1／250）

遺構検出状況（南から）

調査区完掘状況（北西から）

横江（よこえ）D遺跡

所 在 地　白山市横江町地内　　調査期間　平成21年７月16日～同年12月24日

調査面積　2,280㎡　　調査担当　白田義彦　大西　顕

調査区位置図（S＝１／25,000）

調査成果の要点

- 遺跡は、弥生時代及び中世の集落跡。
- 弥生時代では後期後半頃の竪穴建物を検出した。
- 弥生時代後期～古墳時代前期頃の河道を検出した。
- 中世では、掘立柱建物や土坑、溝、竪穴状遺構を検出した。

本遺跡は、手取川扇状地上に位置し、標高は遺構検出面で、15.5m～16.7mを測り、北東方向に緩やかに傾斜している。

本調査は、北陸新幹線建設工事に伴う調査であり、本年度は付替市道部分の調査を実施している。調査区は、パール団地とJR北陸本線に挟まれた位置にある。A～G区まで、計７つの調査区に分割して実施している。地表面下は厚い造成盛土であり、この下は、旧耕作土、遺物包含層、黄灰色土（基盤層）であり、黄灰色土上面が検出面となる。遺構密度は全般に薄いが、E区、F区では密度が高くなる。

弥生時代の遺構は、C区において竪穴建物（SI01）を検出している。SI01は一辺約５m、深さ約40cmを測る。床面下で貼床土を検出している。覆土からは弥生時代後期後半代の土器が出土している。検出建物は１棟であり、小規模な集落形態であったことが窺える。この他、B区、E区下層で弥生時代後期から古墳時代前期頃の自然河道や溝を検出した。また、E区下層では、打製石斧が出土しており、当時期の遺物である可能性がある。

古代では、調査区から須恵器が少量出土するものの、明確な遺構は検出されなかった。

中世では、B、C、D、E、F区において、遺構を確認している。特にE区、F区で密度が高く、掘立柱建物を多数検出している。SB02は総柱の掘立柱建物で、12世紀頃の建物と推定される。面積は100㎡以上の建物と推定される。重複して総柱建物が検出されており、数時期の変遷がたどれる。

SI02は約3.5m四方の方形を呈し、深さ約１mの深い竪穴状遺構である。性格を明確に示す遺物は出土しなかったが、貯蔵施設、作業場などの性格が可能性としてあげられる。覆土からは白磁片や12世紀頃の多くの土師器皿が出土しており、ロクロ土師器と非ロクロ土師器が出土している。E区では15世紀頃の土師器も出土しており、断続的ながら集落活動は継続していくものと推定される。なお、G区の総柱の掘立柱建物（SB03）の柱穴からは14世紀頃の砥が出土している。

近世では、A区、C区で河道を検出し、陶磁器類が出土している。

なお、B区からは、底面に凹凸のある特徴的な溝（SD03）を検出した。

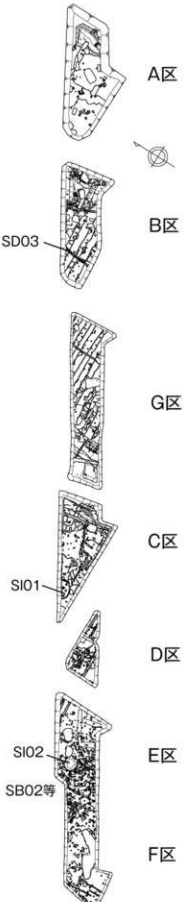
また、隣接地で野々市町の区画整理事業に伴う発掘調査が継続中であり、これら調査成果をあわせて、集落の変遷について検討する必要がある。　（大西　顕）

C区　SI01南半部完掘状況（南東から）

E区　SI02完掘状況（西から）

F区　掘立柱建物群（北から）

B区　SD03完掘状況（北から）

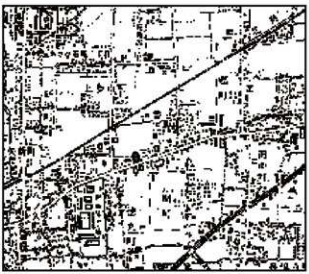


横江D遺跡全体図（S＝1／1,000）

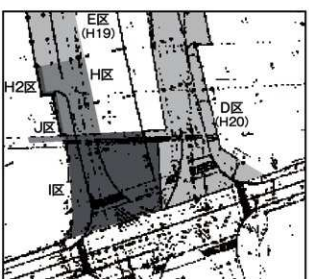
五歩市遺跡（海側幹線）

所 在 地　白山市五歩市町地内　　調査期間　平成21年９月１日～同年12月15日

調査面積　2,080㎡　　調査担当　立原秀明　森　由佳



遺跡位置図（S＝１／25,000）



調査区位置図（S＝１／1,500）

調査成果の要点

- 主に弥生時代、中世、近世の集落跡を確認した。
- 弥生時代後期の竪穴建物を３棟検出した。
- 中世では、掘立柱建物、竪穴状土坑等を確認し、さらにそれらを区画する溝を検出し、陶磁器等が出土した。
- 近世では、平成20年度調査で確認された北国街道の側溝の可能性がある溝の延長を確認した。

五歩市遺跡は、白山市の北部の沖積地に立地する。今回の発掘調査は、道路改築及び地域活力基盤創造交付金（街路）事業一般国道305号及び都市計画道路金沢鶴来線工事を原因とするもので、平成19年度より継続して行われている。

今回の調査は、４地区（H区、H２区、I区、J区）を対象に実施した結果、主に弥生時代、中世、近世の集落跡を確認した。

弥生時代後期頃の遺構では、まず北部のH区で建て替えを含めて３棟程度の竪穴建物を検出した。その内の辺10m以上で平面形態が隅丸方形を呈する大型建物内部からは緑色凝灰岩の剥片等が出土しており、玉生産が行われていた可能性が考えられる。また、I区中央部では、北西－南東方向を流路とする１条の溝を検出し、これより南側では、弥生時代の遺構がみられないことから、集落域を画する溝の可能性が考えられる。

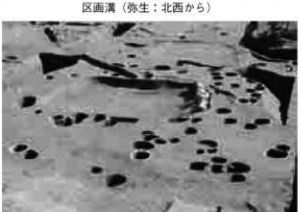
中世の遺構は、H区、I区の中央部、南西部において掘立柱建物１棟または２棟と竪穴状土坑２～４基ほどで構成されるまとまりがみられた。その周辺にはこれらを区画するように溝が配されており、それぞれのまとまりは屋敷地を示すものと考えられる。

また、I区の南東端で２条の溝を検出した。西側の平成20年度の調査区（D区）から延長するもので、近世の北国街道の側溝である可能性が考えられる。　（土屋宣雄）

調査区遠景（Ⅰ区：北西から）

区画溝（弥生：北西から）

竪穴建物（弥生：北東から）



掘立柱建物、竪穴状土坑等（中世：北から）

北国街道（側溝）（近世：東から）

五歩市遺跡（北陸新幹線関連）

所 在 地　白山市五歩市町地内
調査面積　1,380㎡

調査期間　平成21年４月14日～同年11月24日
調査担当　松山和彦　稲葉浩一　山川史子
　　坂下博晃　端　猛　荒川真希子

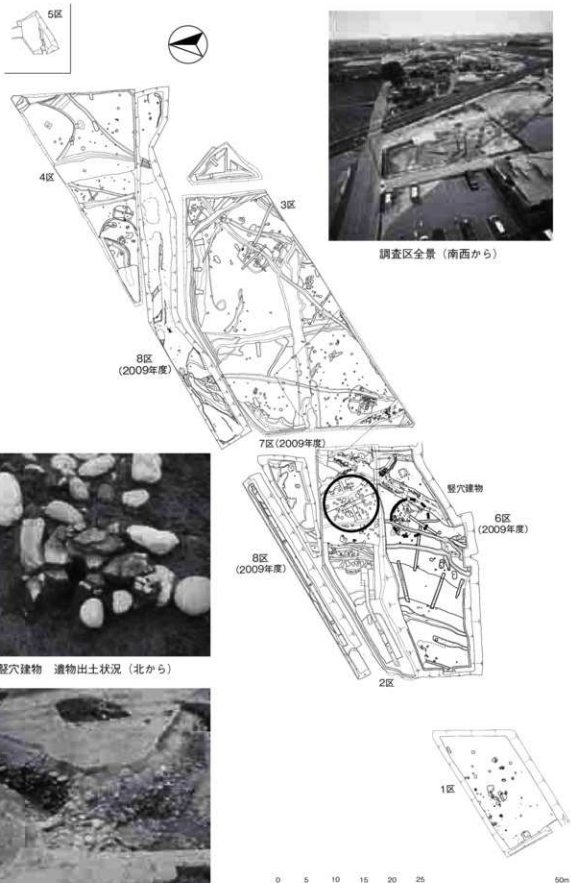
遺跡位置図（S＝１／25,000）

調査成果の要点

- 弥生時代後期後半から古墳時代前期を中心とした集落である。
- 緑色凝灰岩片や管玉が出土し、玉生産の痕跡を示す。
- 竪穴建物１棟の他、弥生時代・古代・江戸時代の溝が検出された。
- 今年度調査区の西側ほど、河川の影響を受けた堆積が、厚く見られる。

本調査は北陸新幹線建設に先立ち、JR北陸本線の山側近接部を調査したもので、昨年度に続き２年目となる。2008年度は１区から５区の調査を行い、2009年度は６区（４～６月）、７区（７月）、８区（11月）の調査を実施した。前年度同様、弥生時代後期後半から古墳時代前期を中心とする遺物が出土し、検出された遺構の多くもその時期に属するものである。

６区は600㎡ほどで前年度２区の南側にあたる。調査区中央やや西よりの部分に２区へ続く自然河道が検出された。この河道を堺に西側では、弥生時代の遺構は数条の溝と幾つかのピットのみで、遺物の出土も少なく集落の縁辺部と考えられる。この西側部分では上層に江戸時代の溝が、主に南北方向で検出された。遺物は少ないが、肥前焼の染付皿など18世紀前半頃のものがみられる。河道東側では、前年度２区で検出された竪穴建物のすぐ南側に、法仏期の大甕などを出土する竪穴建物が確認された。この周囲からは加工痕のある緑色凝灰岩や管玉が出土し、この集落で玉生産が行われていたことを示す。この竪穴建物を切るように南北に２条、幅１ｍほどで断面箱形のしっかりと掘られた溝が２区へと続く。弥生時代の包含層上面ですでに確認されており、竪穴建物より新しいがそれほど時期差はないようである。この２条の溝より古い東西方向の溝状遺構からは、弥生時代後期前半（猫橋期）の土器が出土し、この集落の中では最も古い時期を示していると思われる。また、竪穴建物の東側に、やはり２区へと続くやや幅広（２ｍ強）の溝が検出された。この溝は底面より須恵器を出土し古代以降の遺物は見られないことから、古代の溝と考えられる。弥生時代の包含層より上方から検出できた。この溝には南東方向から別の溝が合流しており、合流地点には意識的に川原石などを埋め込み水の流れを止めたような痕跡が確認できた。７区は100㎡ほどで前年度の２区の北側にあたり、２区から続く溝を３条確認している。８区は700㎡弱で前年度の２、３、４区と線路とにはさまれた部分で、市道や用水路下にあたり構造物による攪乱を受けている部分もあった。建物等は検出されず、前年度３区から続く溝の続きが確認された。（山川史子）



調査区全景（南西から）

6区竪穴建物　遺物出土状況（北から）

6区　古代の溝合流地点（北から）

1区～8区　遺構図

松任城跡（まつとうじょう）

所 在 地　白山市相木町地内　　調査期間　平成21年11月２日～同年12月16日

調査面積　840㎡　　調査担当　浜崎悟司　中泉絵美子

遺跡位置図（S＝１／25,000）

調査成果の要点

・松任城築城以前、平安時代集落跡の縁辺部。
・土坑、畝溝検出。
・平安の土師皿、須恵器双耳瓶など出土。

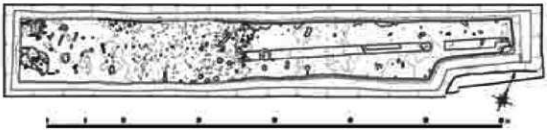
松任城跡は、白山市古城町おかりや公園地内周辺に本丸が所在したとされる近世の城跡である。

一向一揆時代では松任組の本拠となり、一揆解体後は織田方の城として城郭化が進んだが、徳川幕府が発した一国一城令により廃城となった。廃城後の二の丸東半部には蔵が建てられ、明治時代にそれらが解体された以後はこの地一帯に町役場・市役所や小学校、北陸本線松任駅が建設されるといった建設・開発が進んだ。松任城の内堀は昭和初期まで残されていたことから、本丸や内堀の位置・範囲は現在でもある程度確認ができるが、本丸以外の郭や外堀に関しては、その痕跡を見ることはできない。

松任城跡に関するこれまでの発掘調査例としては、松任市教育委員会により、平成11年に松任市役所移転後の生涯学習センター建設に伴う二の丸・三の丸跡の発掘調査と、平成19年に松任駅前区画整理に伴う発掘調査とが実施されている。

今回の調査は北陸新幹線建設によるもので、調査区は本丸跡地であるおかりや公園より北に約150ｍの地点、JR 北陸本線松任駅の西隣にあたる。調査区では土坑、畝溝などの遺構を検出した。調査区の東側は遺構が希薄であった。遺構から出土した遺物は平安時代の土師器、須恵器等であり、松任城築城以前の、集落の縁辺部にあたるとみられる。松任城に関係している可能性のある近世の遺物は、擂鉢や肥前唐津の破片等が出土しているが、ごく少ないものである。調査区内では外堀の痕跡は検出されず、この調査区は松任城外堀の内部か外部かどちらにあたる地点かは、確認できなかった。

（中泉絵美子）



調査区全体図（S＝１／500）

調査区全景（南西から）

土師器出土状況

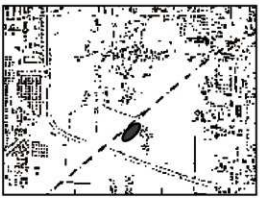
須恵器（双耳瓶）出土状況

調査区全体写真

高見遺跡

所 在 地　白山市北安田町地内

調査面積　9,400㎡



遺跡位置図（S＝1／25,000）

調査期間　平成21年4月14日～同年12月9日

調査担当　浜崎悟司　澤辺利明　岩瀬由美　加藤克郎　中泉絵美子

調査成果の要点

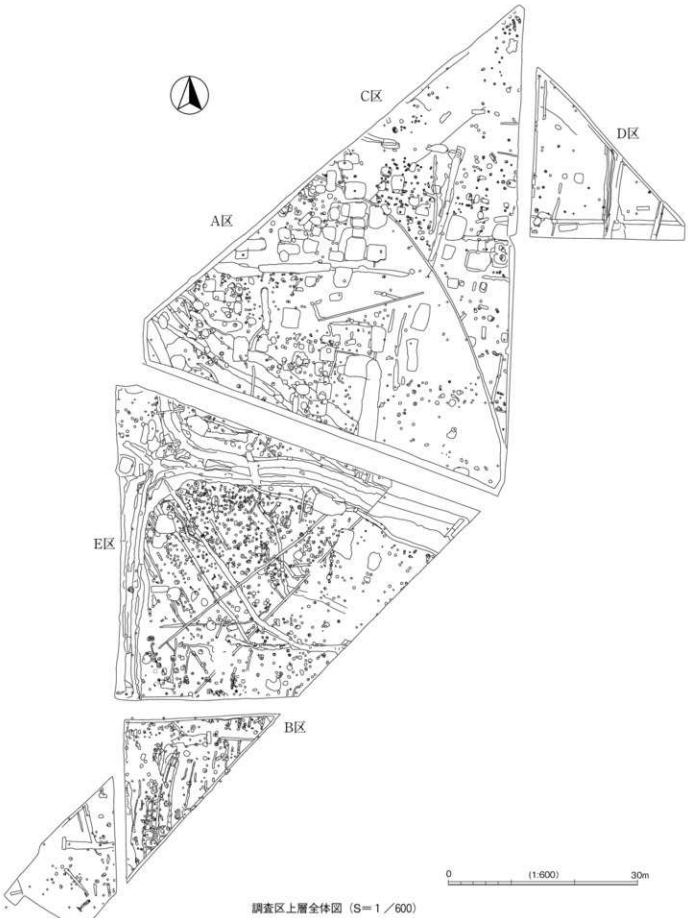
- 上下2層の遺構面を確認した。
- 弥生時代後期～室町時代の複合遺跡を確認した。
- 弥生時代終末期の竪穴建物を1棟確認した。
- 奈良・平安時代の竪穴建物、掘立柱建物、畝溝群等を確認した。
- 鎌倉・室町時代の掘立柱建物、竪穴状遺構、区画溝等を確認した。

高見遺跡はJR松任駅から北西に約1.5kmのJR北陸本線南側に位置する。手取扇状地の扇端部に立地し、大きくは北西側の日本海に向けて緩やかに傾斜する地形であるが、細かい微高地と低地が複雑に入り組んだ地形となっており、その中を縫うように手取川の山島用水系の大小の水路が流れている。調査はそれら水路等の関係でA～E区に分割して行い、調査区の南西端に当たるB区の一部を除いて2面の遺構面が確認された。河川の氾濫等による礫層や砂層が生活面を被覆したために複数の生活面が形成されたものである。上層は中世を中心とし、下層は弥生～古代を中心とする。

下層では、弥生時代終末期の竪穴建物1棟、奈良時代の竪穴建物11棟、奈良・平安時代の掘立柱建物7棟以上などを確認した。弥生時代の竪穴建物は調査区外に延びているため全体規模は不明だが、径約9mの隅丸方形か多角形を呈するとみられる。奈良時代の竪穴建物は一辺2～4mの小型の方形又は長方形で、カマドや煙道が一部で確認された。柱穴はいずれも検出されていない。掘立柱建物は1×4間、2×2間、2×3間の側柱建物を確認した。竪穴建物も掘立柱建物も3～4棟ずつがまとまって検出されているが、共に主軸にはばらつきがあり、一部で切り合いも有することから、2～3時期の変遷が想定される。

上層遺構の年代は鎌倉時代と室町時代の2時期あるが、室町時代後半に中心を持つ。竪穴状遺構を約60基検出したほか、掘立柱建物を構成する柱穴群を多数と、それらを区画する溝を確認した。遺構の状況から屋敷地の一角であることは疑い得ないが、宝篋印塔の破片なども出土していることから、近接地に墓域があったことも想定される。また、一部の溝からは室町時代から昭和にかけての陶磁器が出土し、その脇には現在も用水が流れていることから、500年以上もの間、規模を変えながらほぼ同じ位置で用水として利用されていたことが明らかとなった。

遺跡全体を概観すると、弥生時代や奈良・平安時代の遺構が東～南東側に、鎌倉・室町時代の遺構が西～北西側に分布している。地形が北西側に向けて低くなっていくことを考慮すると、弥生時代～平安時代にかけての調査区北西部は水はけが悪いために居住に適さず、その後手取川支流の氾濫による土砂の堆積や用水の整備による治水が進んだことなどによって鎌倉・室町時代頃には地盤が安定し、居住適地となったのではないかと推定される。（岩瀬由美）



調査区上層全体図（S＝1／600）

A区上層　俯瞰

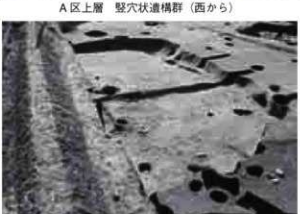
E区上層　俯瞰

B区下層　俯瞰

C･D区下層　俯瞰

A区上層　竪穴状遺構群（西から）

B区　竪穴建物カマド跡（北から）



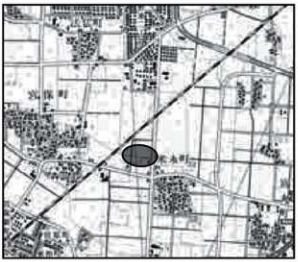
B区下層　竪穴建物（北東から）

D区下層　掘立柱建物（北から）

北出遺跡

所 在 地　白山市米永町地内　　調査期間　平成21年６月22日～同年12月25日

調査面積　4,100㎡　　調査担当　山川史子　金山哲哉　坂下博晃　小田栄一



遺跡位置図（S＝１／25,000）

調査成果の要点

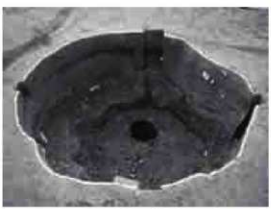
- 12世紀後半～14世紀初頭の集落跡。
- 掘立柱建物７棟、柵、竪穴状遺構、井戸、土坑、溝などを検出した。
- 掘立柱建物内に竪穴状遺構が伴うものがある。
- 住居域と墓域とがみられる。

北出遺跡はJR北陸線の東側にあり、北陸新幹線車両基地建設に伴う発掘調査が平成21年度から始まった。手取扇状地上の扇端に近い部分に立地し、現在は標高17mから18mほどあり西へ向かって下がっている。すぐ西側の宮保Ｂ遺跡、宮保館跡などが同年度に調査され、時期的に重なる部分もあり、場の使い方や集落のあり方など今後の検討課題である。工事等の関係で主要遺構図にあるように、１区から５区に分け調査を行った。近くを流れていた河川の影響を受け砂質土の堆積が何層かみられ、その厚さも場所によってまちまちである。遺構の掘り込み面もそれに伴うように複数面みられる。２区あたりでは水の影響による砂質土の堆積が厚めで、その上部に２面の掘り込み面、下部にも複数の掘り込み面がある。１区では上部の面は削平され、また地山も２区より下がってきているためか、２区の下部の面と同レベルで建物などが検出された。１・２区を東西に流れる溝は最も古い段階のもので、建物にも３段階ほどは時間差があると思われる。５区の遺構の多くは上部の面の段階のものかと考えられるが、間の砂質土の堆積が薄いようで、下の段階のものも見えている。５区の南壁沿いには近現代の溝が検出されたが、他の遺構は中世のものである。

最も西側の１区では鉄塔の西側に遺構の集中がみられた。掘立柱建物が５棟確認でき、そのうち最も大きな南北４間×東西５間の建物には、東側の２間分に南北に２つ繋がるようにして竪穴状遺構が検出された。竪穴状遺構は南側の方が深く、北側の浅い方は焼けて硬化した底面をもつ。浅い方は土間状での使用が、深い方は貯蔵スペースとしての使用や、土間の方からの排水施設などとの関連が想定できる。この掘立柱建物の東側には炭化物を多量に含む層のある土坑があり、土師器皿が埋土の斜めの堆積にのるように出土しており、ある時期にはオープンな状態でごみ捨て穴として利用されたようである。他に井戸が４基あり、最も北にある１基のみ水溜部に曲物が使われていた。鉄塔から２区の西側にかけては空間が広がり、２区東側から５区にかけて居住域があったようである。最も東側の４区には集石や積み石の見られる土坑が集中し、墓と想定されるものもあり、墓域の可能性がある。

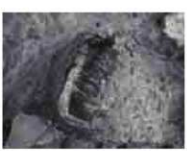
遺物は全体的に少ないが、土坑や井戸、溝などから、土師器皿・鍋、加賀焼、越前焼、珠洲焼、中国産磁器（梅瓶破片、青磁など）、瀬戸・美濃焼、温石、砥石、鉄製品（刀子など）、漆製品（烏帽子、漆器）、土錘、櫛などが出土した。　（山川史子）

1区　掘立柱建物とそれに伴う竪穴状遺構（南から）

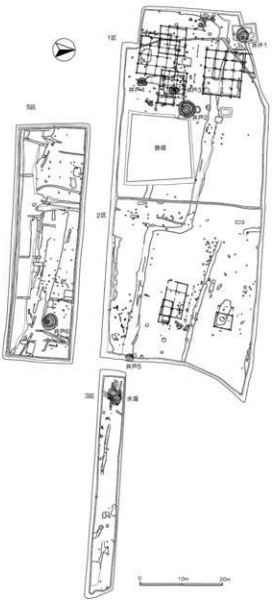


5区　大きな掘方の井戸（北から）

4区　積み石のある土坑（西から）



3区　水溜（？）底出土の櫛



主要遺構図

宮保館跡・宮保B遺跡

所 在 地　白山市宮保町地内
調査面積　7,900㎡

調査期間　平成21年4月14日～同年10月15日
調査担当　岡本恭一　安中哲徳　谷内明央
　　小田栄一　細山いづみ

遺跡位置図（S＝1／25,000）

調査成果の要点

- 堀に囲まれた中世の館跡と周辺の屋敷地群を確認した。
- 堀からは柿経の一部が、中世墓と思われる土坑からは烏帽子が出土した。
- 堀の掘削以前につくられた石組井戸と素掘り井戸を検出した。石組井戸は13世紀代に遡る可能性がある。
- 遺跡は15世紀前半頃を中心に12～16世紀にわたって存続した。

宮保館跡・宮保B遺跡は松任駅から小松駅方面に約3㎞南東側の標高15.2m前後の手取川扇状地扇端部に位置する。JR北陸本線を挟んだ海側（宮保館跡）と山側（宮保B遺跡）の各調査区で堀、掘立柱建物、竪穴状遺構、井戸、溝、石列などの鎌倉・室町時代の遺構を確認した。

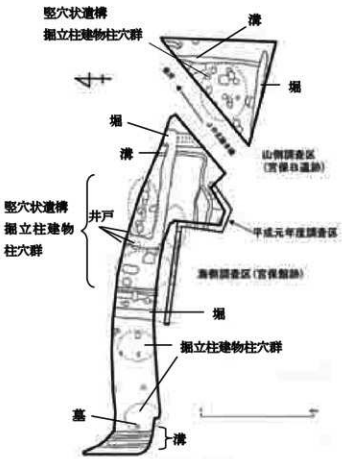
海側で検出したコの字状に巡る堀は、幅約4.5～5m、深さ約0.8～1mを測り、内幅約40mの方形区画の南端部にあたると考えられる。堀からは、土師器皿や陶磁器、石製品、金属製品、漆器碗、木製品などが出土した。遺物から15世紀前半頃に掘られたと考えられるが、東辺部は掘り直しが行われており、15世紀後半頃までは存続していたと考えられる。また、堀の南東隅からは柿経（こけらきょう）の一部が出土し、法華経の一部が確認された。柿経は何枚もの薄く細長い板に経典を書写したもので、平安時代末頃から江戸時代頃に見られる。亡くなった人の供養や死後の安楽を願い、一束にまとめて寺院に埋納したり、川に流すなどして使われたと考えられる。堀の西辺は石組や素掘の井戸の埋没後に切り込んで掘られており、遺跡から出土する遺物の時期が12～16世紀頃と幅広いことから、15世紀前半頃に館の堀が掘られる以前から遺跡が存在したことは明らかである。最も古い石組井戸は出土遺物から13世紀代に遡る可能性がある。

方形に囲まれた堀の内側では掘立柱建物や竪穴状遺構、土坑などを検出し、堀の外側の両調査区では幅約3～4mの堀状や屋敷地を区画する溝、掘立柱建物、竪穴状遺構、墓と考えられる方形の土坑を確認した。竪穴状遺構には長方形と隅丸方形のものがあり、1辺約3～4m、深さ約30～50cmのものが中心である。一部が重複したものや、近接した場所に何度も掘り直されたものが多く、石列は壁の弱い部分を補強するためのものと考えられる。掘立柱建物の内部に掘られたものもあり、半地下式の貯蔵施設、あるいは生産に伴う作業場とも考えられる。

墓と考えられる長方形の土坑は、長さ約1.9m、幅約1.1m、深さ約0.3mを測り、底から副葬品として置かれた土師器皿や漆器碗、刀子と共に漆塗りの烏帽子（えぼし）が出土した。全国的にも全形が確認できる状態での出土例は少なく、貴重な発見となった。

以上から宮保館跡・宮保Ｂ遺跡は12世紀以降に成立し、15世紀前半頃には堀に囲まれた館を中心として、周囲に屋敷地群が広がり、16世紀以降に縮小していく様相を呈することが明らかとなった。

宮保の地は、12～13世紀頃に代々白山宮の神主職を務めた人物の存在が知られており、白山宮上道氏系の宮保氏の館が置かれたと推測される地域である。今回の調査で確認された遺構とは時期的な相違があるものの、これらの文献記録との対比も今後の課題となる。（細山いづみ）



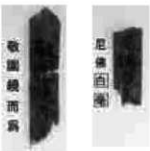
主要遺構配置図（S＝１／2,000）

堀に囲まれた館跡の全景（南から）

堀内部の完掘状況（東から）

烏帽子（えぼし）

墓の副葬品出土状況（東から）



柿経（こけらきょう）

平成21年度下半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

下半期は、白江梯川遺跡（小松市・平成14年度調査）、金沢城跡（県庁跡地）（金沢市・平成20年度調査）、番匠遺跡・番匠鎌田遺跡（白山市・平成20年度調査）、横江Ｄ遺跡・二日市イシバチ遺跡（白山市・平成20年度調査）、古府・国分遺跡（七尾市・平成18年度調査）、飯田町遺跡（珠洲市・平成19年度調査）の出土品整理作業を実施した。

白江梯川遺跡は、上半期から引き続き木器の実測・トレース作業を行った。番匠遺跡では打製石斧、横江Ｄ遺跡・二日市イシバチ遺跡では甕、壺、高坏など形の多く残った弥生土器が多数出土しており、復元もあわせて行った。

元料理旅館の跡地である飯田町遺跡は海辺に近い江戸時代の遺跡で、上品な雰囲気をもつ染付の皿や、今回初めて知った焙烙（素焼きの平たい鍋）が多く出土していた。また「福」の文字を細い線で囲んだ染付などは模様はおめでたく繊細だが、実測・トレースは神経を使って大変だった。他、瘀壺、紅壺、徳利など当時の生活様式を示す多くの製品が出土していた。なお、金沢城跡では石瓦、飯田町遺跡では石の井戸枠など、実測の力量が試される下半期の整理作業だった。

（松田智恵子）

白江梯川遺跡　木製品（楯）実測

金沢城跡　石瓦の分類・接合

飯田町遺跡　陶磁器の分類・接合

県関係調査グループ

下半期は加茂遺跡（津幡町・平成16年度調査）、七尾城跡（七尾市・平成17～19年度調査）の出土品整理作業を行った。

加茂遺跡は出土品実測・トレース、遺構図トレース作業を行った。上半期に行った加茂遺跡（河北縦断道路）と比べて出土品の内容も違い、特に縄文土器が多く、文様も様々で拓本をとるのにも、凹

凸があり深い所までなかなかきれいにとれず苦労した。私自身、今まで、縄文土器は小さい破片の断面図しか実測経験がなく、今回初めて文様までの細かい実測を行い、時間はかかったがとてもよい勉強になった。縄文土器の他、弥生土器、須恵器など様々であったが、破片が部分的なものも多く、傾き、口径などの判断が難しく、図上で復元するのが大変であった。

七尾城跡は、昨年度に引き続き、出土品実測・トレース作業を行った。木器や、昨年と同様の土師器皿が多かった。他にも陶磁器などがあったが、破片がかなり小さく、傾き、口径は出すのに苦労した。また、甲冑の小札が今年度にもあり、その取り扱いに注意しながらの細かい作業であった。

（北野清美）

加茂遺跡　縄文土器実測

加茂遺跡　石器実測

七尾城跡　土師器皿実測

特定事業調査グループ

下半期は10月中旬から11月中旬にかけて遺物の箱数は少ないが、３遺跡の記名・分類・接合から遺構図トレースまでの一連の作業を行った。

栄町遺跡（七尾市・平成20年度調査）は、奈良・平安時代を中心とした集落跡から出土した須恵器の坏、甕や木柱痕等を実測。少ない土器の中でも、内外底の両面に「水」と墨書された有台坏、外底面いっぱいに十文字を入れた無台坏が印象に残った。

二日市イシバチ遺跡（野々市町・平成19・20年度調査）は、弥生時代中期の深鉢、弥生時代後期頃の甕、高坏、打製石斧、磨石等を実測。中新保遺跡（白山市・平成20・21年度調査）は、弥生時代から古墳時代にかけての甕、中世のすり鉢、青磁碗、金属製品では小刀１点を実測した。

11月中旬からは、畝田・寺中遺跡（金沢市・平成18年度調査）の整理に入り、まずは主に農具などを中心とした木製品の実測からスタートした。この遺跡の木製品のメインは、中世の住居跡から出土した劣化損傷や歪みが激しい曲物の井戸側である。直径が小さいもので40cm 位から大きいもので70cm 位の大きさがあるため、皆作業机にあがり曲物の内側に身体を突っ込んだ状態での不自然な姿勢が続いた。担当者との確認作業をしつつもなかなか実測がはかどらない事もあって、

一様に疲労感をつのらせていったものの、全員がOKをもらった時にその場に大きな安堵感が広がった。木製品実測の次は、主に弥生～古墳時代、中世の集落跡から出土した土器の記名・分類・接合作業に入った。個体数は多いが破片の摩耗が著しく、接合してもすぐに接合面からはずれてしまい、かなりの数の補強をしつつも次年度の実測時迄何とか無事にパンケースに鎮座していて欲しいと願うばかりである。

下半期の最後は加茂遺跡（津幡町・平成15年度調査）で、今年度の上半期に記名・分類・接合・復元作業を終えてある土器の実測を行って平成21年度の全行程を終えた。

（新谷由子）

畝田・寺中遺跡　土器の分類・接合

畝田・寺中遺跡　曲物井戸実測①

畝田・寺中遺跡　曲物井戸実測②

掘立柱建物の平面設計について
—石川県内の古代遺跡例から—

浜崎　悟司

1．はじめに

古代集落遺跡の報告に際しては文字資料や関係の古文書等にも配慮しなければならないが、我々埋文担当者としての本分は他時代遺跡の場合と同様、遺構・遺物の正確な調査と的確な評価にあろう。その点に関連して掘立柱建物についてみると「基礎研究」が未だ不充分であると感じられる点が私にはある。他分野については専門家もおり、我々は検討を依頼することもできるが、標記の件に関しては我々が検討すべきでありながらほとんど進歩がみられない。この件について最近少し考えるところがあったので紙幅を借りて私見を紹介し、各位の批判を仰ぎたい。

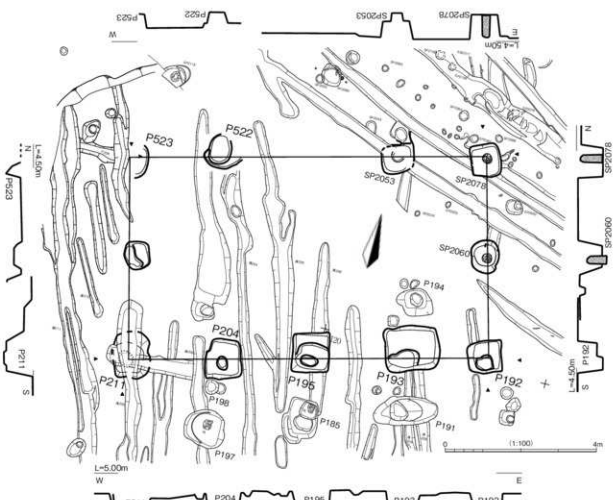


図1　掘立柱建物遺構図の例（津幡町加茂遺跡 SB71）

2．現状と課題

古代の掘立柱建物は本県においては毎年のように発掘調査される機会のある、ごく一般的な遺構である。その報告に際しては、柱穴が建物毎に抽出され、例えば図１のように関係する柱穴を結んだ線を付加した遺構図が作成される。付加線についてはそれが何を示すのか通例的に明記されないが、建物に関する記述の内の「規模」と合致する場合が多いことから建物壁の位置（屋内外の境目）を念頭に置いたものとの理解が一つには成り立つであろう。遺構図に付加線のない報告においても建物規模の記述がある場合、やはりそこには「壁」が想定されているのであろう。ただし掘立柱建物の壁の平面位置の推定について私は、恥ずかしながら、定まった方式を人から聞いた覚えが無い。私は柱穴（柱痕）の心々をなるべく直線で長方形につなぐことを旨としており、そのような提示方法自体について他の人から特に意見されたことはない。他の調査員に聞いてみても状況は私の場合とほとんど同様である。柱と建物壁の位置関係が判明するような良好な調査例が極めて存在し難いことは衆知のとおりであり、「調査事実」について報告しようとすれば現状が限界であるのかもしれない。しかし、既に充分な蓄積のある掘立柱建物集落の遺構図面には柱痕（柱根）と建物の壁との平面的な関係について窺い知るための手掛りが本当に潜んでいないものであろうか。小稿ではこの点について考究してみたい。

なお記述上「壁の位置」では高床倉庫の場合等について問題が生じそうにも思える。小論では問題をより一般化して取り扱うために以下、掘立柱建物平面形の「設計」を取り扱う課題とし、報告書等における建物平面図への付加線のことを「（設計の）復元線」と呼ぶことにする。建物設計の存在の

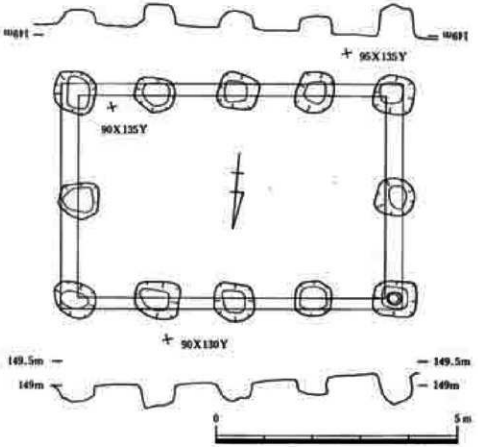


図２　建物復元線の例（金沢市三小牛ハバ遺跡 SB01　南久和氏による）

有無自体を問う立場もあり得ようが、私見では県内の古代掘立柱建物（正しく抽出・復元された例）すべてに「設計」があったと考える。

私は県外の研究状況には全く疎い者であるが、県内でこの案件について最も深く考察したのは南久和氏ではないかと思う。南氏は金沢市八日市サカイマツ遺跡・同三小牛ハバ遺跡の報告（文献１・２）で古代の掘立柱建物の取り扱いについて方法論を述べている。論旨は明快であり、ほぼ誰にでも理解できると思われるが、誰も氏の方法を採用していない現状は何故であろうか？詳しい事情はわからないが、私見では図２に引用するような氏の建物復元ラインに対する、「報告者の実感」との乖離によるところが大きいのではないかと思料される。集落分析において建物規模は特に重要な指標項目であり、自身が納得できない建物規模を採用して集落構造の分析に踏み込む報告者はいないということであろう。

しかしながら、南氏の考え方・手法が非常に論理的であることは認めなければならない。少なくとも私は僭越ながら大いに評価しているし今後も参考にさせていただく所存である。ただ上述の現状を

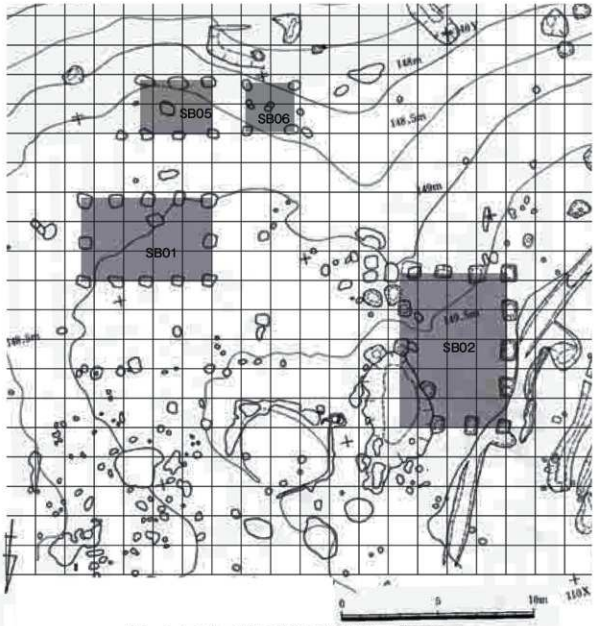


図３－１　三小牛ハバ遺跡の設計復元（５尺方眼　１尺≒31.10cm）

鑑みると、氏が前提とされている事柄のうちに問題点が含まれている懸念が拭いきれない。そして一つにはそれは氏が実寸値として「天平尺の１尺＝29.6cm」を一律にあてて復元線を描いている点に帰せられると私は思う。氏の論ずるとおり一時に設計された建物（群）の内（長辺・短辺・高さなど、部材も含めて）で尺実寸値は共通するものの、それは氏が言うような固定の値ではなく（仮説Ｈ１）、別の契機で設計された建物（群）の尺実寸値とはそれぞれ微妙に異なることが当時の当地における実態だったのではないだろうか？また、氏が全く考慮していないように思われる点であるが、同時に設計された建物群については配置間隔についても建物等と全く等しい尺値が用いられた（仮説Ｈ２）であろう、と私は考えてみることにする。

３．検討の手順と設計復元例

高精度で測量図化された掘立柱建物群を含む遺構平面図をデジタルデータとして閲覧・編集できるようになった現在においては、過去には極めて煩雑かつ膨大な計算を要するが故に気の進まないものであったであろう、建物群設計復元のための検討作業が、格段に容易に行えるようになった。そこで私は仮説Ｈ１・Ｈ２に基づいて、別添に示す手順で県内の古代建物群をいくつか分析してみた。結果、以下のように建物群の設計を復元できる例があったので紹介したい。なお建物配置の記述には山中敏

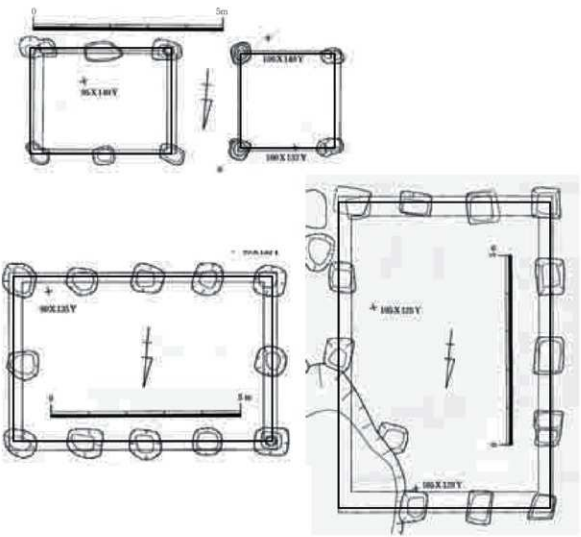


図３－２　三小牛ハバ遺跡の建物復元線　（細線：南氏の２案　太線：浜崎）

史氏による建物配置類型区分（文献10 154頁）（小稿図10に再構成して掲載）を用いた。

①金沢市三小牛ハバ遺跡（文献２）（図３）

昭和62年度の調査。検討データは報告書遺構挿図（１／200）を接合したもの。東西棟であるSB01（22尺×14尺）は西方の南北棟SB02（26尺×18尺）とはＬ字型ｃ類に、南方にある小型の東西棟SB05（12尺×９尺）とは西辺を揃えた並列型ｂ類にそれぞれ配置される。SB05は西のSB06（８尺×８尺）とは直列型ｃ類に配される。これらの建物は１尺≒31.10cm（尺値の算出は図中のグリッド杭間距離又は添付スケールによる　以下同様）とした場合の整数尺で設計されたと理解され、またそれらの配置は基準をSB01の西辺と北辺に置く５尺方眼のマス目に関連づけられることがわかる。

なお、各建物について建物遺構図に南氏の復元線（氏は２案示している）と太線で示した描案を比較のために重ねてみた（図３－２）。描案の復元線は規模について有効であるが、検討データの縮尺の関係上位置の細部を確定しえない（復元線の長方形枠が上下左右に移動する余地がある）不完全なものである。南氏がSB01の長短辺長の比を「３：２」と考えたのに対し、私はここでは22尺：14尺（11：７）と考えてみた。

②白山市横江荘遺跡荘家跡（文献３）（図４）

昭和45年の調査。検討データは報告書の別添付図（１／80）。SB01（18尺×35尺）・SB02（13尺×20尺）・SB04（15尺×27尺）の３棟の東西棟が北辺を揃えた直列型ｂ類に配される。主屋SB01は東西棟で廂（11尺）にも同値の尺を用いたと解される。なお東の副屋SB04について現状**では南北の柱列が５尺方眼に整合しない。建物群から除外して考える他に、未調査である東方にもう１間延びると仮定することによっても一つの解決案をみる。一方、西の副屋SB02に重複する南北棟建物SB03はほぼ復元方眼に合致している。１尺≒29.41cm。**

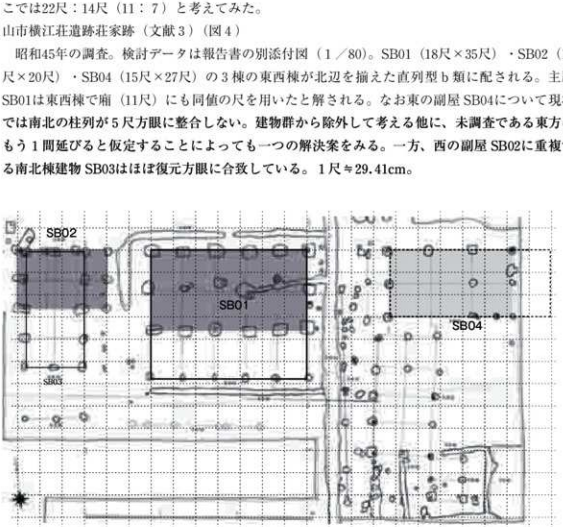


図４　横江荘遺跡荘家跡建物群の設計復元　（S＝１／250）（５尺方眼　１尺≒29.41cm）

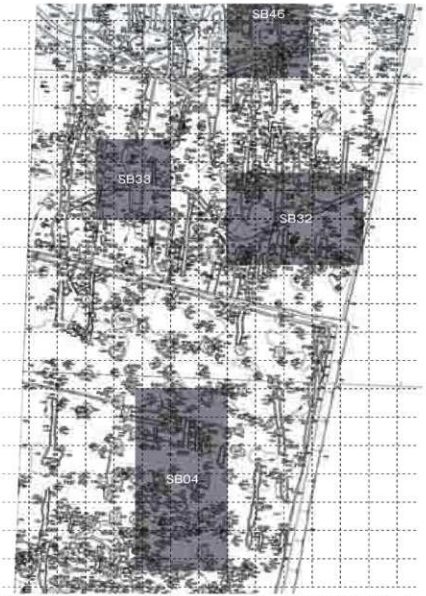


図５　福増カワラケダ遺跡の設計復元（S＝１／200）（５尺方眼　１尺≒29.95cm）

③金沢市福増カワラケダ遺跡（文献４）（図５）

平成14・15年度の調査。検討データは報告書（文献４a）の遺構挿図（１／100）頁を接合したもの。文献４bで報告された建物自体に変更はないが、建物方位の読み取りで記載とは異なる部分がある。東西棟建物SB32（16尺×24尺）の中心長軸と西側柱列を基準とした５尺方眼に割り付けられる。SB32との配置関係は西方の倉庫SB33（14尺×14尺）が準直列型a類、南方の南北棟SB04（32尺×16尺）がL字型b類、北方のSB46がL字型a類である。SB32は東方にさらに延びる可能性があるとみられるが、大型の正方形柱穴をもち柱間が東西・南北とも８尺等間であるなど現状でも「律令型建物」であることを窺わせるに充分である。抽出した建物は全てこのSB32とは数理的に有意の関係に配置されている。従ってこの建物群は建物群配置計画の上でも東西棟が「主屋」であることを示す好例といえよう。１尺≒29.95cm

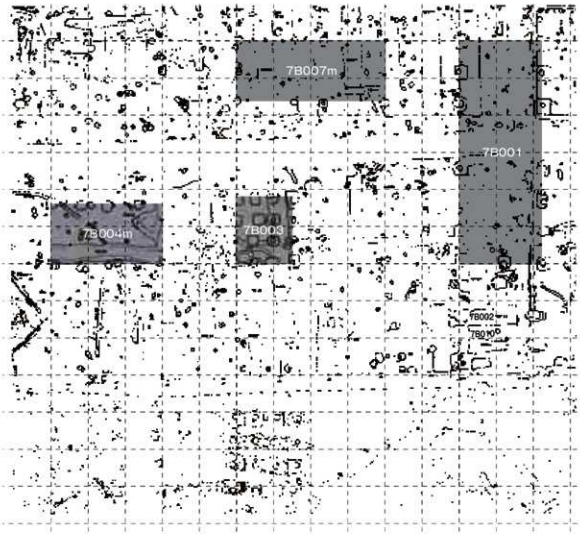


図６　藤江Ｃ遺跡建物群の設計復元（S＝１／300）（10尺方眼　１尺≒29.42cm）

④金沢市藤江Ｃ遺跡（文献５）（図６）

平成10年度の第７次調査Ｂ区の建物群。検討データは当センター保管の地区全体図（１／250）。大型の南北棟建物 SB７B001（60尺×22尺）の西側柱列を東辺とした60尺四方の正方形が建物配置の基準となったと考えられる。正方形の北西隅を北西隅とする東西棟建物 SB７B007（16尺×40尺）、南西隅の３間の総柱建物 SB７B003（18尺×15尺）並びに西方の東西棟建物 SB７B004（16尺×30尺）の３棟はそれぞれ南北棟建物とはＬ字型ａに配置され、総柱建物003と東西棟004とは直列ｂ、003と東西棟007は並列ｂの関係にある。これらの建物は10尺方眼上に整然と位置付けられる。管見の内でも「設計図」の存在を特に強く感じさせるものである、揣論の当否を離れてみても、もっと注目され適切な評価が試みられるべき建物群であろう。なお、本稿の論旨に影響はないと思うが、２棟ある東西棟建物（屋）の規模（東西間数）について、ここでは報告書の記載とはそれぞれ若干異なる理解で示してみた。１尺≒29.42cm。

⑤羽咋市寺家遺跡（文献６）（図７）

昭和53～55年度の調査。検討データは報告書巻末のPLAN19を１／400とみたてたもの。「砂田地区」の中央大型建物群とされるもので、長大な南北棟建物SB01（60尺×16尺）の東側柱列を西辺とした60尺四方の正方形が想定される点が、④と共通する。建物細部において報告書とは理解を少し異にするところがある。１尺≒29.99cm

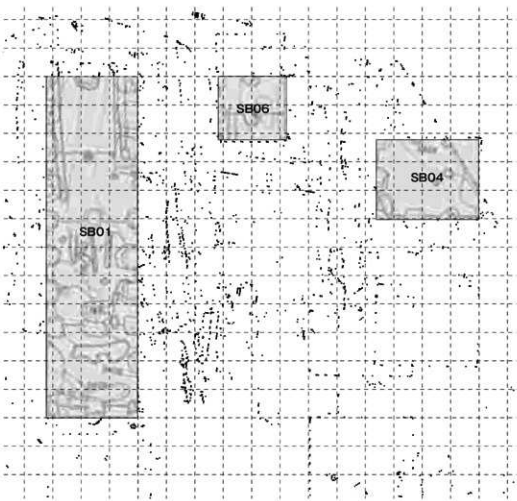


図７　寺家遺跡建物群の設計復元（S＝１／200）（５尺方眼　１尺≒29.99cm）

⑥白山市高見遺跡（図８）

平成21年度の調査（未報告・調査概要は本誌26頁）。検討データは当センター保管の測量成果（１／20）。C地区下層の奈良時代の建物（未命名）。N19°Wを指す２つの南北棟建物である西棟（28尺×15尺）（身舎）と東棟（21尺×15尺）が30尺の間隔を挟んで準並列型の関係にある。西棟柱穴の検出状況からすると建物群は奈良時代中頃の竪穴建物（SI03）に先行する可能性がある。１尺≒28.80cm。

筆者はこの地区の調査担当である。大縮尺の図面を取り扱うことができるので、設計復元図を１尺方眼にて提示しておきたい。建物復元線の南北線の位置は建物間隔を完数尺に見立てることから充分な縛りがかかって決め易い（というか尺値を決定すれば東西の幅が自動的に決まってしまう）が、東西線の位置（南北方向）については柱穴掘り方の範囲でやや「遊び」があって厳密には確定しづらいように感じられる。

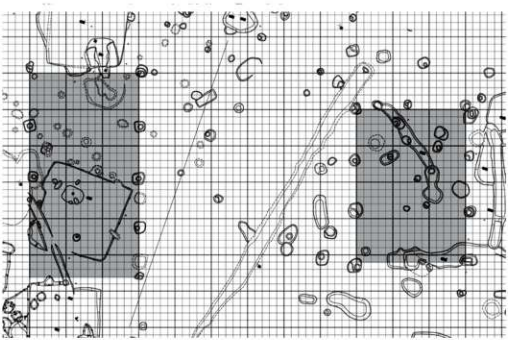


図８－１　高見遺跡Ｃ地区の建物群（１尺方眼　１尺≒28.80cm）

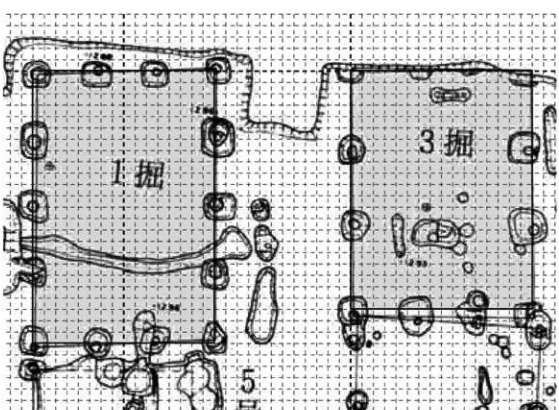


図８－２　法仏遺跡の建物群（１尺方眼　１尺≒30.04cm）

なお至近にある白山市法仏遺跡７次（文献７a）（図８－２）の並列型ｂ類（SB01（24尺×16尺）とSB03（21尺×15尺））も５尺方眼枠に関連付け可能である。１尺≒30.04cm。

高見遺跡例は１尺の値が28cm代で、検討例の中では最小値であるが、６～７世紀に遡るとみられる小松市佐々木ノテウラ遺跡（文献７b）Ⅰ期（SB１・６）の場合（図８－３）さらに小さい値（１尺≒27.7cm）を得ている。これらは充分大縮尺な遺構図面から得られた値であり、有意と考えられる。

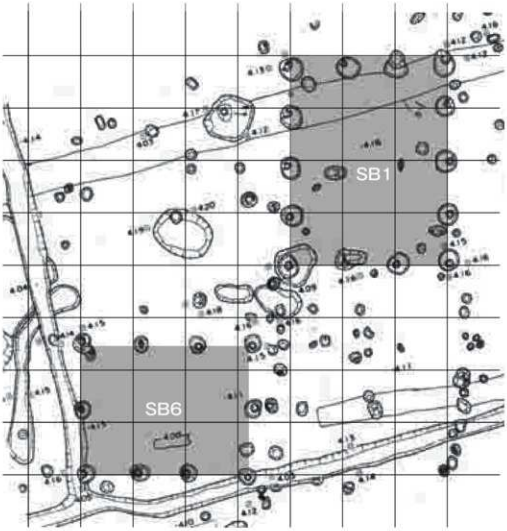
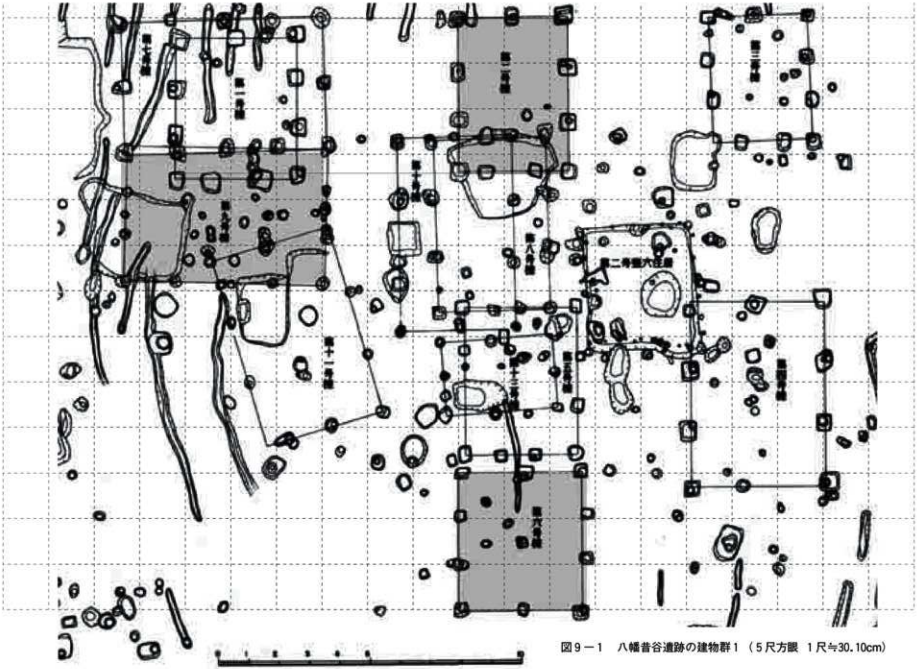


図８－３　佐々木ノテウラ遺跡Ⅰ期の建物群（５尺方眼　１尺≒27.70cm）

⑦七尾市八幡昔谷遺跡Ａ区（文献８）（図９－１～４）

昭和54年度調査。検討データは報告書付図（１／400）。報告書や文献９で分析された内容とは若干異なることになるかもしれないが、小稿の手順を適用すれば図示したように、SB03（14尺×11尺）＋08（19尺×12尺）（１尺≒29.50cm）、SB07（22尺×14尺）＋10（21尺×13尺）（１尺≒29.80cm）、SB01（15尺×14尺）＋04（20尺×15尺）＋05（16尺×13尺）（１尺≒29.82cm）、SB02（17尺×12尺）＋06（15尺×14尺）＋09（22尺×14尺）（１尺≒30.10cm）といった平面的に重複しあうところの多い４組の建物セットを抽出できるであろう。


第十一建
第十二建
第十三建
第十四建
第十五建
第十六建
第十七建
第十八建
第十九建
第二十建
第二十一建
第二十二建
第二十三建
第二十四建
第二十五建
第二十六建
第二十七建
第二十八建
第二十九建
第三十建
第三十一建
第三十二建
第三十三建
第三十四建
第三十五建
第三十六建
第三十七建
第三十八建
第三十九建
第四十建
第四十一建
第四十二建
第四十三建
第四十四建
第四十五建
第四十六建
第四十七建
第四十八建
第四十九建
第五十建
第五十一建
第五十二建
第五十三建
第五十四建
第五十五建
第五十六建
第五十七建
第五十八建
第五十九建
第六十建
第六十一建
第六十二建
第六十三建
第六十四建
第六十五建
第六十六建
第六十七建
第六十八建
第六十九建
第七十建
第七十一建
第七十二建
第七十三建
第七十四建
第七十五建
第七十六建
第七十七建
第七十八建
第七十九建
第八十建
第八十一建
第八十二建
第八十三建
第八十四建
第八十五建
第八十六建
第八十七建
第八十八建
第八十九建
第九十建
第九十一建
第九十二建
第九十三建
第九十四建
第九十五建
第九十六建
第九十七建
第九十八建
第九十九建
第百建
第百一建
第百二建
第百三建
第百四建
第百五建
第百六建
第百七建
第百八建
第百九建
第百十建
第百十一建
第百十二建
第百十三建
第百十四建
第百十五建
第百十六建
第百十七建
第百十八建
第百十九建
第百二十建
第百二十一建
第百二十二建
第百二十三建
第百二十四建
第百二十五建
第百二十六建
第百二十七建
第百二十八建
第百二十九建
第百三十建
第百三十一建
第百三十二建
第百三十三建
第百三十四建
第百三十五建
第百三十六建
第百三十七建
第百三十八建
第百三十九建
第百四十建
第百四十一建
第百四十二建
第百四十三建
第百四十四建
第百四十五建
第百四十六建
第百四十七建
第百四十八建
第百四十九建
第百五十建
第百五十一建
第百五十二建
第百五十三建
第百五十四建
第百五十五建
第百五十六建
第百五十七建
第百五十八建
第百五十九建
第百六十建
第百六十一建
第百六十二建
第百六十三建
第百六十四建
第百六十五建
第百六十六建
第百六十七建
第百六十八建
第百六十九建
第百七十建
第百七十一建
第百七十二建
第百七十三建
第百七十四建
第百七十五建
第百七十六建
第百七十七建
第百七十八建
第百七十九建
第百八十建
第百八十一建
第百八十二建
第百八十三建
第百八十四建
第百八十五建
第百八十六建
第百八十七建
第百八十八建
第百八十九建
第百九十建
第百九十一建
第百九十二建
第百九十三建
第百九十四建
第百九十五建
第百九十六建
第百九十七建
第百九十八建
第百九十九建
第二百建
第二百一建
第二百二建
第二百三建
第二百四建
第二百五建
第二百六建
第二百七建
第二百八建
第二百九建
第二百十建
第二百十一建
第二百十二建
第二百十三建
第二百十四建
第二百十五建
第二百十六建
第二百十七建
第二百十八建
第二百十九建
第二百二十建
第二百二十一建
第二百二十二建
第二百二十三建
第二百二十四建
第二百二十五建
第二百二十六建
第二百二十七建
第二百二十八建
第二百二十九建
第二百三十建
第二百三十一建
第二百三十二建
第二百三十三建
第二百三十四建
第二百三十五建
第二百三十六建
第二百三十七建
第二百三十八建
第二百三十九建
第二百四十建
第二百四十一建
第二百四十二建
第二百四十三建
第二百四十四建
第二百四十五建
第二百四十六建
第二百四十七建
第二百四十八建
第二百四十九建
第二百五十建
第二百五十一建
第二百五十二建
第二百五十三建
第二百五十四建
第二百五十五建
第二百五十六建
第二百五十七建
第二百五十八建
第二百五十九建
第二百六十建
第二百六十一建
第二百六十二建
第二百六十三建
第二百六十四建
第二百六十五建
第二百六十六建
第二百六十七建
第二百六十八建
第二百六十九建
第二百七十建
第二百七十一建
第二百七十二建
第二百七十三建
第二百七十四建
第二百七十五建
第二百七十六建
第二百七十七建
第二百七十八建
第二百七十九建
第二百八十建
第二百八十一建
第二百八十二建
第二百八十三建
第二百八十四建
第二百八十五建
第二百八十六建
第二百八十七建
第二百八十八建
第二百八十九建
第二百九十建
第二百九十一建
第二百九十二建
第二百九十三建
第二百九十四建
第二百九十五建
第二百九十六建
第二百九十七建
第二百九十八建
第二百九十九建
第三百建
第三百一建
第三百二建
第三百三建
第三百四建
第三百五建
第三百六建
第三百七建
第三百八建
第三百九建
第三百十建
第三百十一建
第三百十二建
第三百十三建
第三百十四建
第三百十五建
第三百十六建
第三百十七建
第三百十八建
第三百十九建
第三百二十建
第三百二十一建
第三百二十二建
第三百二十三建
第三百二十四建
第三百二十五建
第三百二十六建
第三百二十七建
第三百二十八建
第三百二十九建
第三百三十建
第三百三十一建
第三百三十二建
第三百三十三建
第三百三十四建
第三百三十五建
第三百三十六建
第三百三十七建
第三百三十八建
第三百三十九建
第三百四十建
第三百四十一建
第三百四十二建
第三百四十三建
第三百四十四建
第三百四十五建
第三百四十六建
第三百四十七建
第三百四十八建
第三百四十九建
第三百五十建
第三百五十一建
第三百五十二建
第三百五十三建
第三百五十四建
第三百五十五建
第三百五十六建
第三百五十七建
第三百五十八建
第三百五十九建
第三百六十建
第三百六十一建
第三百六十二建
第三百六十三建
第三百六十四建
第三百六十五建
第三百六十六建
第三百六十七建
第三百六十八建
第三百六十九建
第三百七十建
第三百七十一建
第三百七十二建
第三百七十三建
第三百七十四建
第三百七十五建
第三百七十六建
第三百七十七建
第三百七十八建
第三百七十九建
第三百八十建
第三百八十一建
第三百八十二建
第三百八十三建
第三百八十四建
第三百八十五建
第三百八十六建
第三百八十七建
第三百八十八建
第三百八十九建
第三百九十建
第三百九十一建
第三百九十二建
第三百九十三建
第三百九十四建
第三百九十五建
第三百九十六建
第三百九十七建
第三百九十八建
第三百九十九建
第四百建
第四百一建
第四百二建
第四百三建
第四百四建
第四百五建
第四百六建
第四百七建
第四百八建
第四百九建
第四百十建
第四百十一建
第四百十二建
第四百十三建
第四百十四建
第四百十五建
第四百十六建
第四百十七建
第四百十八建
第四百十九建
第四百二十建
第四百二十一建
第四百二十二建
第四百二十三建
第四百二十四建
第四百二十五建
第四百二十六建
第四百二十七建
第四百二十八建
第四百二十九建
第四百三十建
第四百三十一建
第四百三十二建
第四百三十三建
第四百三十四建
第四百三十五建
第四百三十六建
第四百三十七建
第四百三十八建
第四百三十九建
第四百四十建
第四百四十一建
第四百四十二建
第四百四十三建
第四百四十四建
第四百四十五建
第四百四十六建
第四百四十七建
第四百四十八建
第四百四十九建
第四百五十建
第四百五十一建
第四百五十二建
第四百五十三建
第四百五十四建
第四百五十五建
第四百五十六建
第四百五十七建
第四百五十八建
第四百五十九建
第四百六十建
第四百六十一建
第四百六十二建
第四百六十三建
第四百六十四建
第四百六十五建
第四百六十六建
第四百六十七建
第四百六十八建
第四百六十九建
第四百七十建
第四百七十一建
第四百七十二建
第四百七十三建
第四百七十四建
第四百七十五建
第四百七十六建
第四百七十七建
第四百七十八建
第四百七十九建
第四百八十建
第四百八十一建
第四百八十二建
第四百八十三建
第四百八十四建
第四百八十五建
第四百八十六建
第四百八十七建
第四百八十八建
第四百八十九建
第四百九十建
第四百九十一建
第四百九十二建
第四百九十三建
第四百九十四建
第四百九十五建
第四百九十六建
第四百九十七建
第四百九十八建
第四百九十九建
第五百建
第五百一建
第五百二建
第五百三建
第五百四建
第五百五建
第五百六建
第五百七建
第五百八建
第五百九建
第五百十建
第五百十一建
第五百十二建
第五百十三建
第五百十四建
第五百十五建
第五百十六建
第五百十七建
第五百十八建
第五百十九建
第五百二十建
第五百二十一建
第五百二十二建
第五百二十三建
第五百二十四建
第五百二十五建
第五百二十六建
第五百二十七建
第五百二十八建
第五百二十九建
第五百三十建
第五百三十一建
第五百三十二建
第五百三十三建
第五百三十四建
第五百三十五建
第五百三十六建
第五百三十七建
第五百三十八建
第五百三十九建
第五百四十建
第五百四十一建
第五百四十二建
第五百四十三建
第五百四十四建
第五百四十五建
第五百四十六建
第五百四十七建
第五百四十八建
第五百四十九建
第五百五十建
第五百五十一建
第五百五十二建
第五百五十三建
第五百五十四建
第五百五十五建
第五百五十六建
第五百五十七建
第五百五十八建
第五百五十九建
第五百六十建
第五百六十一建
第五百六十二建
第五百六十三建
第五百六十四建
第五百六十五建
第五百六十六建
第五百六十七建
第五百六十八建
第五百六十九建
第五百七十建
第五百七十一建
第五百七十二建
第五百七十三建
第五百七十四建
第五百七十五建
第五百七十六建
第五百七十七建
第五百七十八建
第五百七十九建
第五百八十建
第五百八十一建
第五百八十二建
第五百八十三建
第五百八十四建
第五百八十五建
第五百八十六建
第五百八十七建
第五百八十八建
第五百八十九建
第五百九十建
第五百九十一建
第五百九十二建
第五百九十三建
第五百九十四建
第五百九十五建
第五百九十六建
第五百九十七建
第五百九十八建
第五百九十九建
第六百建
第六百一建
第六百二建
第六百三建
第六百四建
第六百五建
第六百六建
第六百七建
第六百八建
第六百九建
第六百十建
第六百十一建
第六百十二建
第六百十三建
第六百十四建
第六百十五建
第六百十六建
第六百十七建
第六百十八建
第六百十九建
第六百二十建
第六百二十一建
第六百二十二建
第六百二十三建
第六百二十四建
第六百二十五建
第六百二十六建
第六百二十七建
第六百二十八建
第六百二十九建
第六百三十建
第六百三十一建
第六百三十二建
第六百三十三建
第六百三十四建
第六百三十五建
第六百三十六建
第六百三十七建
第六百三十八建
第六百三十九建
第六百四十建
第六百四十一建
第六百四十二建
第六百四十三建
第六百四十四建
第六百四十五建
第六百四十六建
第六百四十七建
第六百四十八建
第六百四十九建
第六百五十建
第六百五十一建
第六百五十二建
第六百五十三建
第六百五十四建
第六百五十五建
第六百五十六建
第六百五十七建
第六百五十八建
第六百五十九建
第六百六十建
第六百六十一建
第六百六十二建
第六百六十三建
第六百六十四建
第六百六十五建
第六百六十六建
第六百六十七建
第六百六十八建
第六百六十九建
第六百七十建
第六百七十一建
第六百七十二建
第六百七十三建
第六百七十四建
第六百七十五建
第六百七十六建
第六百七十七建
第六百七十八建
第六百七十九建
第六百八十建
第六百八十一建
第六百八十二建
第六百八十三建
第六百八十四建
第六百八十五建
第六百八十六建
第六百八十七建
第六百八十八建
第六百八十九建
第六百九十建
第六百九十一建
第六百九十二建
第六百九十三建
第六百九十四建
第六百九十五建
第六百九十六建
第六百九十七建
第六百九十八建
第六百九十九建
第七百建
第七百一建
第七百二建
第七百三建
第七百四建
第七百五建
第七百六建
第七百七建
第七百八建
第七百九建
第七百十建
第七百十一建
第七百十二建
第七百十三建
第七百十四建
第七百十五建
第七百十六建
第七百十七建
第七百十八建
第七百十九建
第七百二十建
第七百二十一建
第七百二十二建
第七百二十三建
第七百二十四建
第七百二十五建
第七百二十六建
第七百二十七建
第七百二十八建
第七百二十九建
第七百三十建
第七百三十一建
第七百三十二建
第七百三十三建
第七百三十四建
第七百三十五建
第七百三十六建
第七百三十七建
第七百三十八建
第七百三十九建
第七百四十建
第七百四十一建
第七百四十二建
第七百四十三建
第七百四十四建
第七百四十五建
第七百四十六建
第七百四十七建
第七百四十八建
第七百四十九建
第七百五十建
第七百五十一建
第七百五十二建
第七百五十三建
第七百五十四建
第七百五十五建
第七百五十六建
第七百五十七建
第七百五十八建
第七百五十九建
第七百六十建
第七百六十一建
第七百六十二建
第七百六十三建
第七百六十四建
第七百六十五建
第七百六十六建
第七百六十七建
第七百六十八建
第七百六十九建
第七百七十建
第七百七十一建
第七百七十二建
第七百七十三建
第七百七十四建
第七百七十五建
第七百七十六建
第七百七十七建
第七百七十八建
第七百七十九建
第七百八十建
第七百八十一建
第七百八十二建
第七百八十三建
第七百八十四建
第七百八十五建
第七百八十六建
第七百八十七建
第七百八十八建
第七百八十九建
第七百九十建
第七百九十一建
第七百九十二建
第七百九十三建
第七百九十四建
第七百九十五建
第七百九十六建
第七百九十七建
第七百九十八建
第七百九十九建
第八百建
第八百一建
第八百二建
第八百三建
第八百四建
第八百五建
第八百六建
第八百七建
第八百八建
第八百九建
第八百十建
第八百十一建
第八百十二建
第八百十三建
第八百十四建
第八百十五建
第八百十六建
第八百十七建
第八百十八建
第八百十九建
第八百二十建
第八百二十一建
第八百二十二建
第八百二十三建
第八百二十四建
第八百二十五建
第八百二十六建
第八百二十七建
第八百二十八建
第八百二十九建
第八百三十建
第八百三十一建
第八百三十二建
第八百三十三建
第八百三十四建
第八百三十五建
第八百三十六建
第八百三十七建
第八百三十八建
第八百三十九建
第八百四十建
第八百四十一建
第八百四十二建
第八百四十三建
第八百四十四建
第八百四十五建
第八百四十六建
第八百四十七建
第八百四十八建
第八百四十九建
第八百五十建
第八百五十一建
第八百五十二建
第八百五十三建
第八百五十四建
第八百五十五建
第八百五十六建
第八百五十七建
第八百五十八建
第八百五十九建
第八百六十建
第八百六十一建
第八百六十二建
第八百六十三建
第八百六十四建
第八百六十五建
第八百六十六建
第八百六十七建
第八百六十八建
第八百六十九建
第八百七十建
第八百七十一建
第八百七十二建
第八百七十三建
第八百七十四建
第八百七十五建
第八百七十六建
第八百七十七建
第八百七十八建
第八百七十九建
第八百八十建
第八百八十一建
第八百八十二建
第八百八十三建
第八百八十四建
第八百八十五建
第八百八十六建
第八百八十七建
第八百八十八建
第八百八十九建
第八百九十建
第八百九十一建
第八百九十二建
第八百九十三建
第八百九十四建
第八百九十五建
第八百九十六建
第八百九十七建
第八百九十八建
第八百九十九建
第九百建
第九百一建
第九百二建
第九百三建
第九百四建
第九百五建
第九百六建
第九百七建
第九百八建
第九百九建
第九百十建
第九百十一建
第九百十二建
第九百十三建
第九百十四建
第九百十五建
第九百十六建
第九百十七建
第九百十八建
第九百十九建
第九百二十建
第九百二十一建
第九百二十二建
第九百二十三建
第九百二十四建
第九百二十五建
第九百二十六建
第九百二十七建
第九百二十八建
第九百二十九建
第九百三十建
第九百三十一建
第九百三十二建
第九百三十三建
第九百三十四建
第九百三十五建
第九百三十六建
第九百三十七建
第九百三十八建
第九百三十九建
第九百四十建
第九百四十一建
第九百四十二建
第九百四十三建
第九百四十四建
第九百四十五建
第九百四十六建
第九百四十七建
第九百四十八建
第九百四十九建
第九百五十建
第九百五十一建
第九百五十二建
第九百五十三建
第九百五十四建
第九百五十五建
第九百五十六建
第九百五十七建
第九百五十八建
第九百五十九建
第九百六十建
第九百六十一建
第九百六十二建
第九百六十三建
第九百六十四建
第九百六十五建
第九百六十六建
第九百六十七建
第九百六十八建
第九百六十九建
第九百七十建
第九百七十一建
第九百七十二建
第九百七十三建
第九百七十四建
第九百七十五建
第九百七十六建
第九百七十七建
第九百七十八建
第九百七十九建
第九百八十建
第九百八十一建
第九百八十二建
第九百八十三建
第九百八十四建
第九百八十五建
第九百八十六建
第九百八十七建
第九百八十八建
第九百八十九建
第九百九十建
第九百九十一建
第九百九十二建
第九百九十三建
第九百九十四建
第九百九十五建
第九百九十六建
第九百九十七建
第九百九十八建
第九百九十九建
第千建
第千一建
第千二建
第千三建
第千四建
第千五建
第千六建
第千七建
第千八建
第千九建
第千十建
第千十一建
第千十二建
第千十三建
第千十四建
第千十五建
第千十六建
第千十七建
第千十八建
第千十九建
第千二十建
第千二十一建
第千二十二建
第千二十三建
第千二十四建
第千二十五建
第千二十六建
第千二十七建
第千二十八建
第千二十九建
第千三十建
第千三十一建
第千三十二建
第千三十三建
第千三十四建
第千三十五建
第千三十六建
第千三十七建
第千三十八建
第千三十九建
第千四十建
第千四十一建
第千四十二建
第千四十三建
第千四十四建
第千四十五建
第千四十六建
第千四十七建
第千四十八建
第千四十九建
第千五十建
第千五十一建
第千五十二建
第千五十三建
第千五十四建
第千五十五建
第千五十六建
第千五十七建
第千五十八建
第千五十九建
第千六十建
第千六十一建
第千六十二建
第千六十三建
第千六十四建
第千六十五建
第千六十六建
第千六十七建
第千六十八建
第千六十九建
第千七十建
第千七十一建
第千七十二建
第千七十三建
第千七十四建
第千七十五建
第千七十六建
第千七十七建
第千七十八建
第千七十九建
第千八十建
第千八十一建
第千八十二建
第千八十三建
第千八十四建
第千八十五建
第千八十六建
第千八十七建
第千八十八建
第千八十九建
第千九十建
第千九十一建
第千九十二建
第千九十三建
第千九十四建
第千九十五建
第千九十六建
第千九十七建
第千九十八建
第千九十九建
第二千建
第二千一建
第二千二建
第二千三建
第二千四建
第二千五建
第二千六建
第二千七建
第二千八建
第二千九建
第二千十建
第二千十一建
第二千十二建
第二千十三建
第二千十四建
第二千十五建
第二千十六建
第二千十七建
第二千十八建
第二千十九建
第二千二十建
第二千二十一建
第二千二十二建
第二千二十三建
第二千二十四建
第二千二十五建
第二千二十六建
第二千二十七建
第二千二十八建
第二千二十九建
第二千三十建
第二千三十一建
第二千三十二建
第二千三十三建
第二千三十四建
第二千三十五建
第二千三十六建
第二千三十七建
第二千三十八建
第二千三十九建
第二千四十建
第二千四十一建
第二千四十二建
第二千四十三建
第二千四十四建
第二千四十五建
第二千四十六建
第二千四十七建
第二千四十八建
第二千四十九建
第二千五十建
第二千五十一建
第二千五十二建
第二千五十三建
第二千五十四建
第二千五十五建
第二千五十六建
第二千五十七建
第二千五十八建
第二千五十九建
第二千六十建
第二千六十一建
第二千六十二建
第二千六十三建
第二千六十四建
第二千六十五建
第二千六十六建
第二千六十七建
第二千六十八建
第二千六十九建
第二千七十建
第二千七十一建
第二千七十二建
第二千七十三建
第二千七十四建
第二千七十五建
第二千七十六建
第二千七十七建
第二千七十八建
第二千七十九建
第二千八十建
第二千八十一建
第二千八十二建
第二千八十三建
第二千八十四建
第二千八十五建
第二千八十六建
第二千八十七建
第二千八十八建
第二千八十九建
第二千九十建
第二千九十一建
第二千九十二建
第二千九十三建
第二千九十四建
第二千九十五建
第二千九十六建
第二千九十七建
第二千九十八建
第二千九十九建
第三千建
第三千一建
第三千二建
第三千三建
第三千四建
第三千五建
第三千六建
第三千七建
第三千八建
第三千九建
第三千十建
第三千十一建
第三千十二建
第三千十三建
第三千十四建
第三千十五建
第三千十六建
第三千十七建
第三千十八建
第三千十九建
第三千二十建
第三千二十一建
第三千二十二建
第三千二十三建
第三千二十四建
第三千二十五建
第三千二十六建
第三千二十七建
第三千二十八建
第三千二十九建
第三千三十建
第三千三十一建
第三千三十二建
第三千三十三建
第三千三十四建
第三千三十五建
第三千三十六建
第三千三十七建
第三千三十八建
第三千三十九建
第三千四十建
第三千四十一建
第三千四十二建
第三千四十三建
第三千四十四建
第三千四十五建
第三千四十六建
第三千四十七建
第三千四十八建
第三千四十九建
第三千五十建
第三千五十一建
第三千五十二建
第三千五十三建
第三千五十四建
第三千五十五建
第三千五十六建
第三千五十七建
第三千五十八建
第三千五十九建
第三千六十建
第三千六十一建
第三千六十二建
第三千六十三建
第三千六十四建
第三千六十五建
第三千六十六建
第三千六十七建
第三千六十八建
第三千六十九建
第三千七十建
第三千七十一建
第三千七十二建
第三千七十三建
第三千七十四建
第三千七十五建
第三千七十六建
第三千七十七建
第三千七十八建
第三千七十九建
第三千八十建
第三千八十一建
第三千八十二建
第三千八十三建
第三千八十四建
第三千八十五建
第三千八十六建
第三千八十七建
第三千八十八建
第三千八十九建
第三千九十建
第三千九十一建
第三千九十二建
第三千九十三建
第三千九十四建
第三千九十五建
第三千九十六建
第三千九十七建
第三千九十八建
第三千九十九建
第四千建
第四千一建
第四千二建
第四千三建
第四千四建
第四千五建
第四千六建
第四千七建
第四千八建
第四千九建
第四千十建
第四千十一建
第四千十二建
第四千十三建
第四千十四建
第四千十五建
第四千十六建
第四千十七建
第四千十八建
第四千十九建
第四千二十建
第四千二十一建
第四千二十二建
第四千二十三建
第四千二十四建
第四千二十五建
第四千二十六建
第四千二十七建
第四千二十八建
第四千二十九建
第四千三十建
第四千三十一建
第四千三十二建
第四千三十三建
第四千三十四建
第四千三十五建
第四千三十六建
第四千三十七建
第四千三十八建
第四千三十九建
第四千四十建
第四千四十一建
第四千四十二建
第四千四十三建
第四千四十四建
第四千四十五建
第四千四十六建
第四千四十七建
第四千四十八建
第四千四十九建
第四千五十建
第四千五十一建
第四千五十二建
第四千五十三建
第四千五十四建
第四千五十五建
第四千五十六建
第四千五十七建
第四千五十八建
第四千五十九建
第四千六十建
第四千六十一建
第四千六十二建
第四千六十三建
第四千六十四建
第四千六十五建
第四千六十六建
第四千六十七建
第四千六十八建
第四千六十九建
第四千七十建
第四千七十一建
第四千七十二建
第四千七十三建
第四千七十四建
第四千七十五建
第四千七十六建
第四千七十七建
第四千七十八建
第四千七十九建
第四千八十建
第四千八十一建
第四千八十二建
第四千八十三建
第四千八十四建
第四千八十五建
第四千八十六建
第四千八十七建
第四千八十八建
第四千八十九建
第四千九十建
第四千九十一建
第四千九十二建
第四千九十三建
第四千九十四建
第四千九十五建
第四千九十六建
第四千九十七建
第四千九十八建
第四千九十九建
第五千建
第五千一建
第五千二建
第五千三建
第五千四建
第五千五建
第五千六建
第五千七建
第五千八建
第五千九建
第五千十建
第五千十一建
第五千十二建
第五千十三建
第五千十四建
第五千十五建
第五千十六建
第五千十七建
第五千十八建
第五千十九建
第五千二十建
第五千二十一建
第五千二十二建
第五千二十三建
第五千二十四建
第五千二十五建
第五千二十六建
第五千二十七建
第五千二十八建
第五千二十九建
第五千三十建
第五千三十一建
第五千三十二建
第五千三十三建
第五千三十四建
第五千三十五建
第五千三十六建
第五千三十七建
第五千三十八建
第五千三十九建
第五千四十建
第五千四十一建
第五千四十二建
第五千四十三建
第五千四十四建
第五千四十五建
第五千四十六建
第五千四十七建
第五千四十八建
第五千四十九建
第五千五十建
第五千五十一建
第五千五十二建
第五千五十三建
第五千五十四建
第五千五十五建
第五千五十六建
第五千五十七建
第五千五十八建
第五千五十九建
第五千六十建
第五千六十一建
第五千六十二建
第五千六十三建
第五千六十四建
第五千六十五建
第五千六十六建
第五千六十七建
第五千六十八建
第五千六十九建
第五千七十建
第五千七十一建
第五千七十二建
第五千七十三建
第五千七十四建
第五千七十五建
第五千七十六建
第五千七十七建
第五千七十八建
第五千七十九建
第五千八十建
第五千八十一建
第五千八十二建
第五千八十三建
第五千八十四建
第五千八十五建
第五千八十六建
第五千八十七建
第五千八十八建
第五千八十九建
第五千九十建
第五千九十一建
第五千九十二建
第五千九十三建
第五千九十四建
第五千九十五建
第五千九十六建
第五千九十七建
第五千九十八建
第五千九十九建
第六千建
第六千一建
第六千二建
第六千三建
第六千四建
第六千五建
第六千六建
第六千七建
第六千八建
第六千九建
第六千十建
第六千十一建
第六千十二建
第六千十三建
第六千十四建
第六千十五建
第六千十六建
第六千十七建
第六千十八建
第六千十九建
第六千二十建
第六千二十一建
第六千二十二建
第六千二十三建
第六千二十四建
第六千二十五建
第六千二十六建
第六千二十七建
第六千二十八建
第六千二十九建
第六千三十建
第六千三十一建
第六千三十二建
第六千三十三建
第六千三十四建
第六千三十五建
第六千三十六建
第六千三十七建
第六千三十八建
第六千三十九建
第六千四十建
第六千四十一建
第六千四十二建
第六千四十三建
第六千四十四建
第六千四十五建
第六千四十六建
第六千四十七建
第六千四十八建
第六千四十九建
第六千五十建
第六千五十一建
第六千五十二建
第六千五十三建
第六千五十四建
第六千五十五建
第六千五十六建
第六千五十七建
第六千五十八建
第六千五十九建
第六千六十建
第六千六十一建
第六千六十二建
第六千六十三建
第六千六十四建
第六千六十五建
第六千六十六建
第六千六十七建
第六千六十八建
第六千六十九建
第六千七十建
第六千七十一建
第六千七十二建
第六千七十三建
第六千七十四建
第六千七十五建
第六千七十六建
第六千七十七建
第六千七十八建
第六千七十九建
第六千八十建
第六千八十一建
第六千八十二建
第六千八十三建
第六千八十四建
第六千八十五建
第六千八十六建
第六千八十七建
第六千八十八建
第六千八十九建
第六千九十建
第六千九十一建
第六千九十二建
第六千九十三建
第六千九十四建
第六千九十五建
第六千九十六建
第六千九十七建
第六千九十八建
第六千九十九建
第七千建
第七千一建
第七千二建
第七千三建
第七千四建
第七千五建
第七千六建
第七千七建
第七千八建
第七千九建
第七千十建
第七千十一建
第七千十二建
第七千十三建
第七千十四建
第七千十五建
第七千十六建
第七千十七建
第七千十八建
第七千十九建
第七千二十建
第七千二十一建
第七千二十二建
第七千二十三建
第七千二十四建
第七千二十五建
第七千二十六建
第七千二十七建
第七千二十八建
第七千二十九建
第七千三十建
第七千三十一建
第七千三十二建
第七千三十三建
第七千三十四建
第七千三十五建
第七千三十六建
第七千三十七建
第七千三十八建
第七千三十九建
第七千四十建
第七千四十一建
第七千四十二建
第七千四十三建
第七千四十四建
第七千四十五建
第七千四十六建
第七千四十七建
第七千四十八建
第七千四十九建
第七千五十建
第七千五十一建
第七千五十二建
第七千五十三建
第七千五十四建
第七千五十五建
第七千五十六建
第七千五十七建
第七千五十八建
第七千五十九建
第七千六十建
第七千六十一建
第七千六十二建
第七千六十三建
第七千六十四建
第七千六十五建
第七千六十六建
第七千六十七建
第七千六十八建
第七千六十九建
第七千七十建
第七千七十一建
第七千七十二建
第七千七十三建
第七千七十四建
第七千七十五建
第七千七十六建
第七千七十七建
第七千七十八建
第七千七十九建
第七千八十建
第七千八十一建
第七千八十二建
第七千八十三建
第七千八十四建
第七千八十五建
第七千八十六建
第七千八十七建
第七千八十八建
第七千八十九建
第七千九十建
第七千九十一建
第七千九十二建
第七千九十三建
第七千九十四建
第七千九十五建
第七千九十六建
第七千九十七建
第七千九十八建
第七千九十九建
第八千建
第八千一建
第八千二建
第八千三建
第八千四建
第八千五建
第八千六建
第八千七建
第八千八建
第八千九建
第八千十建
第八千十一建
第八千十二建
第八千十三建
第八千十四建
第八千十五建
第八千十六建
第八千十七建
第八千十八建
第八千十九建
第八千二十建
第八千二十一建
第八千二十二建
第八千二十三建
第八千二十四建
第八千二十五建
第八千二十六建
第八千二十七建
第八千二十八建
第八千二十九建
第八千三十建
第八千三十一建
第八千三十二建
第八千三十三建
第八千三十四建
第八千三十五建
第八千三十六建
第八千三十七建
第八千三十八建
第八千三十九建
第八千四十建
第八千四十一建
第八千四十二建
第八千四十三建
第八千四十四建
第八千四十五建
第八千四十六建
第八千四十七建
第八千四十八建
第八千四十九建
第八千五十建
第八千五十一建
第八千五十二建
第八千五十三建
第八千五十四建
第八千五十五建
第八千五十六建
第八千五十七建
第八千五十八建
第八千五十九建
第八千六十建
第八千六十一建
第八千六十二建
第八千六十三建
第八千六十四建
第八千六十五建
第八千六十六建
第八千六十七建
第八千六十八建
第八千六十九建
第八千七十建
第八千七十一建
第八千七十二建
第八千七十三建
第八千七十四建
第八千七十五建
第八千七十六建
第八千七十七建
第八千七十八建
第八千七十九建
第八千八十建
第八千八十一建
第八千八十二建
第八千八十三建
第八千八十四建
第八千八十五建
第八千八十六建
第八千八十七建
第八千八十八建
第八千八十九建
第八千九十建
第八千九十一建
第八千九十二建
第八千九十三建
第八千九十四建
第八千九十五建
第八千九十六建
第八千九十七建
第八千九十八建
第八千九十九建
第九千建
第九千一建
第九千二建
第九千三建
第九千四建
第九千五建
第九千六建
第九千七建
第九千八建
第九千九建
第九千十建
第九千十一建
第九千十二建
第九千十三建
第九千十四建
第九千十五建
第九千十六建
第九千十七建
第九千十八建
第九千十九建
第九千二十建
第九千二十一建
第九千二十二建
第九千二十三建
第九千二十四建
第九千二十五建
第九千二十六建
第九千二十七建
第九千二十八建
第九千二十九建
第九千三十建
第九千三十一建
第九千三十二建
第九千三十三建
第九千三十四建
第九千三十五建
第九千三十六建
第九千三十七建
第九千三十八建
第九千三十九建
第九千四十建
第九千四十一建
第九千四十二建
第九千四十三建
第九千四十四建
第九千四十五建
第九千四十六建
第九千四十七建
第九千四十八建
第九千四十九建
第九千五十建
第九千五十一建
第九千五十二建
第九千五十三建
第九千五十四建
第九千五十五建
第九千五十六建
第九千五十七建
第九千五十八建
第九千五十九建
第九千六十建
第九千六十一建
第九千六十二建
第九千六十三建
第九千六十四建
第九千六十五建
第九千六十六建
第九千六十七建
第九千六十八建
第九千六十九建
第九千七十建
第九千七十一建
第九千七十二建
第九千七十三建
第九千七十四建
第九千七十五建
第九千七十六建
第九千七十七建
第九千七十八建
第九千七十九建
第九千八十建
第九千八十一建
第九千八十二建
第九千八十三建
第九千八十四建
第九千八十五建
第九千八十六建
第九千八十七建
第九千八十八建
第九千八十九建
第九千九十建
第九千九十一建
第九千九十二建
第九千九十三建
第九千九十四建
第九千九十五建
第九千九十六建
第九千九十七建
第九千九十八建
第九千九十九建
第十千建
第十千一建
第十千二建
第十千三建
第十千四建
第十千五建
第十千六建
第十千七建
第十千八建
第十千九建
第十千十建
第十千十一建
第十千十二建
第十千十三建
第十千十四建
第十千十五建
第十千十六建
第十千十七建
第十千十八建
第十千十九建
第十千二十建
第十千二十一建
第十千二十二建
第十千二十三建
第十千二十四建
第十千二十五建
第十千二十六建
第十千二十七建
第十千二十八建
第十千二十九建
第十千三十建
第十千三十一建
第十千三十二建
第十千三十三建
第十千三十四建
第十千三十五建
第十千三十六建
第十千三十七建
第十千三十八建
第十千三十九建
第十千四十建
第十千四十一建
第十千四十二建
第十千四十三建
第十千四十四建
第十千四十五建
第十千四十六建
第十千四十七建
第十千四十八建
第十千四十九建
第十千五十建
第十千五十一建
第十千五十二建
第十千五十三建
第十千五十四建
第十千五十五建
第十千五十六建
第十千五十七建
第十千五十八建
第十千五十九建
第十千六十建
第十千六十一建
第十千六十二建
第十千六十三建
第十千六十四建
第十千六十五建
第十千六十六建
第十千六十七建
第十千六十八建
第十千六十九建
第十千七十建
第十千七十一建
第十千七十二建
第十千七十三建
第十千七十四建
第十千七十五建
第十千七十六建
第十千七十七建
第十千七十八建
第十千七十九建
第十千八十建
第十千八十一建
第十千八十二建
第十千八十三建
第十千八十四建
第十千八十五建
第十千八十六建
第十千八十七建
第十千八十八建
第十千八十九建
第十千九十建
第十千九十一建
第十千九十二建
第十千九十三建
第十千九十四建
第十千九十五建
第十千九十六建
第十千九十七建
第十千九十八建
第十千九十九建
第二十千建
第二十千一建
第二十千二建
第二十千三建
第二十千四建
第二十千五建
第二十千六建
第二十千七建
第二十千八建
第二十千九建
第二十千十建
第二十千十一建
第二十千十二建
第二十千十三建
第二十千十四建
第二十千十五建
第二十千十六建
第二十千十七建
第二十千十八建
第二十千十九建
第二十千二十建
第二十千二十一建
第二十千二十二建
第二十千二十三建
第二十千二十四建
第二十千二十五建
第二十千二十六建
第二十千二十七建
第二十千二十八建
第二十千二十九建
第二十千三十建
第二十千三十一建
第二十千三十二建
第二十千三十三建
第二十千三十四建
第二十千三十五建
第二十千三十六建
第二十千三十七建
第二十千三十八建
第二十千三十九建
第二十千四十建
第二十千四十一建
第二十千四十二建
第二十千四十三建
第二十千四十四建
第二十千四十五建
第二十千四十六建
第二十千四十七建
第二十千四十八建
第二十千四十九建
第二十千五十建
第二十千五十一建
第二十千五十二建
第二十千五十三建
第二十千五十四建
第二十千五十五建
第二十千五十六建
第二十千五十七建
第二十千五十八建
第二十千五十九建
第二十千六十建
第二十千六十一建
第二十千六十二建
第二十千六十三建
第二十千六十四建
第二十千六十五建
第二十千六十六建
第二十千六十七建
第二十千六十八建
第二十千六十九建
第二十千七十建
第二十千七十一建
第二十千七十二建
第二十千七十三建
第二十千七十四建
第二十千七十五建
第二十千七十六建
第二十千七十七建
第二十千七十八建
第二十千七十九建
第二十千八十建
第二十千八十一建
第二十千八十二建
第二十千八十三建
第二十千八十四建
第二十千八十五建
第二十千八十六建
第二十千八十七建
第二十千八十八建
第二十千八十九建
第二十千九十建
第二十千九十一建
第二十千九十二建
第二十千九十三建
第二十千九十四建
第二十千九十五建
第二十千九十六建
第二十千九十七建
第二十千九十八建
第二十千九十九建
第三十千建
第三十千一建
第三十千二建
第三十千三建
第三十千四建
第三十千五建
第三十千六建
第三十千七建
第三十千八建
第三十千九建
第三十千十建
第三十千十一建
第三十千十二建
第三十千十三建
第三十千十四建
第三十千十五建
第三十千十六建
第三十千十七建
第三十千十八建
第三十千十九建
第三十千二十建
第三十千二十一建
第三十千二十二建
第三十千二十三建
第三十千二十四建
第三十千二十五建
第三十千二十六建
第三十千二十七建
第三十千二十八建
第三十千二十九建
第三十千三十建
第三十千三十一建
第三十千三十二建
第三十千三十三建
第三十千三十四建
第三十千三十五建
第三十千三十六建
第三十千三十七建
第三十千三十八建

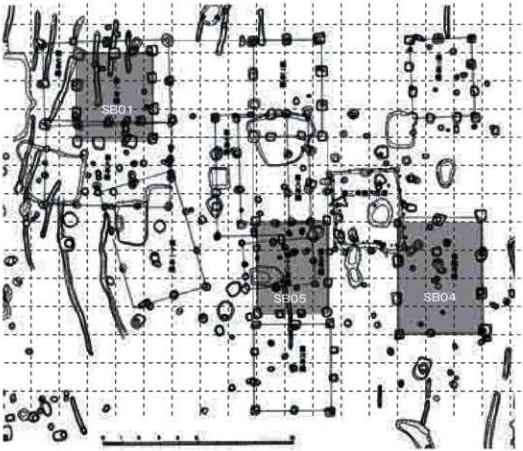


図９－２　八幡昔谷遺跡の建物群２（５尺方眼　１尺≒29.82cm）

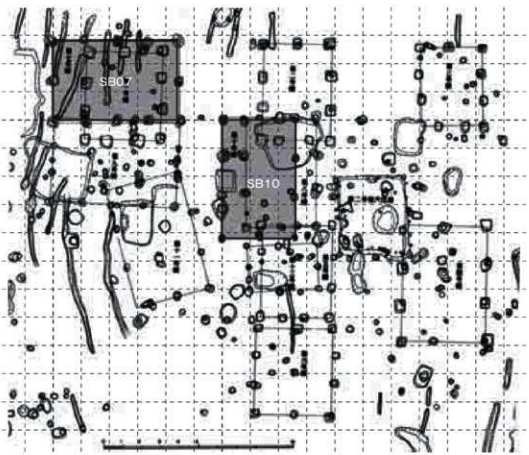


図９－３　八幡昔谷遺跡の建物群３（５尺方眼　１尺≒29.80cm）

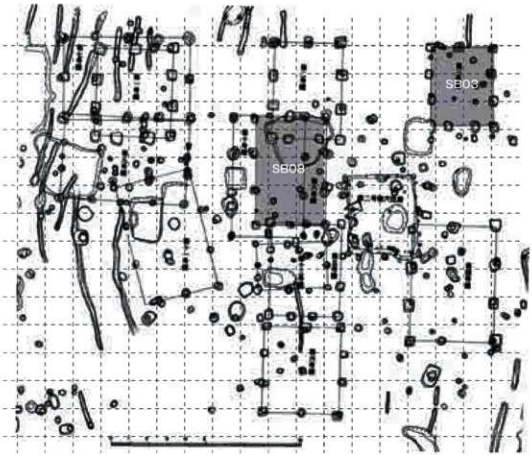


図９－４　八幡昔谷遺跡の建物群４（５尺方眼　１尺≒29.50cm）

なお、この遺跡の性格について報告書は官衙関連施設、文献９は倉庫の不在と建物（屋）の小規模さから下位の集落とみており、両者のあいだには等閑視できない評価の差がある。私見では建物群中の倉庫の欠落について説明を用意できないが、円形掘方の柱穴で構成されるとはいえ一定規模の東西棟建物であるSB07やSB09を主屋とする小群があることから、官と所縁のある施設であった段階があるとの想定も可能とみたい。

４．分析結果の検討

以上のように仮説Ｈ１並びにＨ２については検証される事例があることがわかった。実際には取り扱ってみた例の全てにおいて解を得ている訳ではないので、まだまだ反証される余地はあるが、それでもやや手詰まり感のある集落分析の手法としては有望と考えるのでここに紹介した次第である。スケールの取り込みにさえ注意すれば、再現性が高い方法とみられるので追証いただければ幸いである。私には設計尺の実寸値は「建物規模」や「柱間数」に匹敵する、掘立柱建物の基礎データ項目であるように思われる。なお検討結果の尺値は対象とした建物群毎に異なるが、これは当地における天平尺等の「公定値」の存在を否定するものではないことを付言しておきたい。尺の実寸値が時代を降るにつれて伸長傾向にあるという論説（文献11等）を離れるとしても、実地の「縄」張りに際しては寒暖・湿乾等の物理的影響が不可避であったと考えられるからである。

個々の建物について復元線設定のための定式を見つけた訳ではないが、上に紹介した諸例からすれば、何れも概ね建物柱穴列の心々を大きくは外れない箇所に建物復元線を配置しうる結果が得られている。但し、これは検討が可能であったごく限られたデータについて看取される傾向であり、一般化できるかどうかは今後の追証や検討事例の増加を待って判断すべきであろう。提示した検討結果は、未検討である従来の掘立柱建物報告例個々の遺構図に付加された線について、建物復元線として何らの妥当性を保証するものではない。

ところで上例⑥のような官衙とは考え難い建物群においても、設計尺を推定可能な場合があることについては一考を要すると思う。奈良文化財研究所編『古代の官衙遺跡』遺構編Ⅰが「建物間の距離」について記すところに、「官衙の建物には・・・計画的な配置が認められることが多く、建物相互の距離をきりの良い完数尺に整えて配置している場合もしばしばみられる」（文献10 156頁）とあるが、5×n（nは自然数）尺単位の配置が想定できた小論の復元例については全てが官衙たりうるかは全く以て疑問である。②は荘園管理施設とされるもので広義には官衙とみなしうる建物群であろうが3棟の東西棟建物が併存しかつ5n尺間隔で配置されたと理解するためには一部建物規模の推定復元が必要であるし、また容易に配置が想定できた⑥や建て替え毎に5n尺単位配置をとる⑦（の東西棟建物が欠落する段階）などは建物設計と配置が整数尺と5n尺間隔で復元できる点を除いてしまえば「官衙的様相」はむしろ非常に乏しい集落遺跡である。計画的とはいえ小規模で単純な配置の建物群については、官衙性というよりは、造営の計画性なり同時性―「設計」―が表出したもの、という程度に理解しておきたい。そして翻ってみればこのことは、紹介した手順が遺跡の「官衙的様相」の濃淡にかかわらず、掘立柱建物群を分析するにあたって一般的に有効な手法であることを示すものではないか、と思わせる。

5．おわりに

今後は同様な手順で建物群設計の良好な復元例を蓄積し、例えば個々の建物について柱根（痕）と復元線の位置との関係を整理していくことによって標記の課題の解明に近づくことができるのではないだろうか。本県埋文担当者の多くは既に掘立柱建物を取り扱った経験があると思う。掘立柱建物（群）の設計についてお気付きの点があれば御指摘願いたい。

遺跡名	建物番号	方位	南北間数	東西間数	南北長報告値(cm)	東西長報告値(cm)	南北尺数	東西尺数	設計尺値(cm)	南北設計長(cm)	東西設計長(cm)
三小牛ババ	SB01	5.5W	2	4	474	710	14	22	31.10	435.40	684.20
	SB02	5.5W	4	3	852	568	26	18	31.10	808.60	559.80
	SB05	5.5W	1	2	266	355	9	12	31.10	279.90	373.20
	SB06	5.5W	1	1	266	266	8	8	31.10	248.80	248.80
横江荘家跡	SB01身舎	7.2W	2	5	534	855	18	35	29.41	529.38	1,029.35
	SB02	7.2W	2	3	402	594	13	20	29.41	382.33	588.20
	SB04身舎	7.2W	2	3	450	837	15	27	29.41	441.15	794.07
福増カワラケダ	SB04	2.2W	4	2	960	500	32	16	29.95	958.40	479.20
	SB32	2.2W	2	3	470	740	16	24	29.95	479.20	718.80
	SB33	2.2W	2	2	400	400	14	14	29.95	419.30	419.30
	SB46	2.2W	2	2	620	420		14	29.95		419.30
藤江C	SB7B001	0.5W	7	2	1,750	650	60	22	29.42	1,765.20	647.24
	SB7B003	0.5W	3	3	510	460	18	15	29.42	529.56	441.30
	SB7B004m	0.5W	1	4	490	660	16	30	29.42	470.72	882.60
	SB7B007m	0.5W	2	5	490	680	16	40	29.42	470.72	1,176.80
寺家	SB01	10.6W	9	2	1,800	480	60	16	29.99	1,799.40	479.84
	SB04	10.6W	2	3	420	540	14	18	29.99	419.86	539.82
	SB06	10.6W	2	2	570	360	11	12	29.99	329.89	359.88
高見	SBC－西	19.1W	4	1			28	15	28.80	806.40	432.00
	SBC－東	19.1W	3	2			21	15	28.80	604.80	432.00
法仏7次	1号掘立	4.5W	4	3	730	490	24	16	30.04	720.96	480.64
	3号掘立	4.5W	3	3	670	480	21	15	30.04	630.84	450.60
佐々木ノテウラ	SB01	13.7E	4	3	540 520	420	20	15	27.70	554.00	415.50
	SB06身舎	13.7E	2	3	350	450 440	12	16	27.70	332.40	443.20
八幡昔谷	第2号棟	3.0W	3	2(3)	524	360	17	12	30.10	511.70	361.20
	第6号棟	3.0W	3	2	462	402	15	14	30.10	451.50	421.40
	第9号棟	3.0W	2	4	460	668	14	22	30.10	421.40	662.20
	第1号棟	3.0W	3	2(3)	472	400	15	14	29.82	447.30	417.48
	第4号棟	3.0W	3	2(3)	620	440	20	15	29.82	596.40	447.30
	第5号棟	3.0W	3	2(3)	490	364	16	13	29.82	477.12	387.66
	第7号棟	4.5W	2	4	440	660	14	22	29.80	417.20	655.60
	第10号棟	4.5W	3	2	642	380	21	13	29.80	625.80	387.40
	第3号棟	5.2W	3	2(3)	420	326	14	11	29.50	413.00	324.50
	第8号棟	5.2W	3	2	590	368	19	12	29.50	560.50	354.00

表　建物一覧

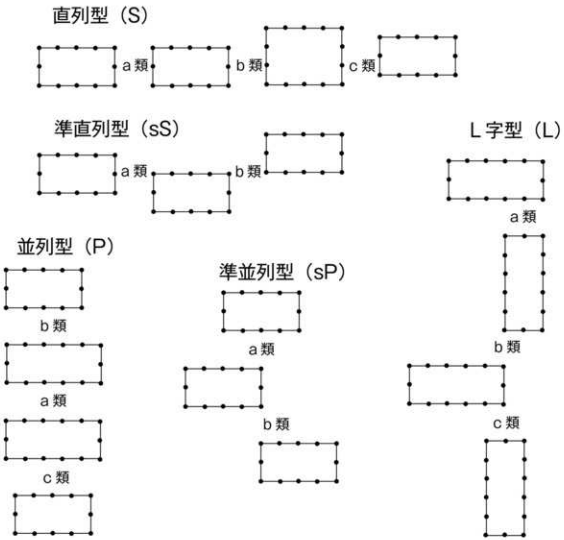


図10　掘立柱建物配置の類型区分（山中敏史氏による）

参考文献

1　金沢市教育委員会『八日市サカイマツ遺跡』1991年

2　金沢市教育委員会『三小牛ハバ遺跡』1994年

3　松任市教育委員会・石川考古学研究会『東大寺領横江庄遺跡』1983年

4 a　金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）『中屋サワ遺跡Ⅱ横江荘遺跡Ⅰ福増カワラケダ遺跡Ⅰ下福増遺跡Ⅰ』2005年

b　金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）『福増カワラケダ遺跡Ⅱ』2006年

5　（財）石川県埋蔵文化財センター『金沢市藤江Ｃ遺跡Ⅶ』2002年

6　石川県立埋蔵文化財センター『寺家遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1986年

7 a　松任市教育委員会『法仏遺跡第７次発掘調査報告書』1991年

b　石川県立埋蔵文化財センター『佐々木ノテウラ遺跡』1986年

8　七尾市教育委員会『八幡昔谷遺跡』1981年

9　田嶋明人『奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡』（石川考古学研究会編『北陸の考古学』1983年）

10　（独）奈良文化財研究所『古代の官衙遺跡遺構編Ⅰ』2003年

11　宮本長二郎『発掘遺構による建物復元の方法論』（『東北芸術工科大学歴史遺産研究』No. 3　2005年）

平面図検討の方法
用意するもの
平面図（充分な解像度―筆者の場合100分の１図面を200dpi 程度―をもつ画像データ）
画像処理ソフト（サイズ変更・回転・測距表示機能があるもの）
表計算ソフト

手順
建物群を含む範囲をデータ化（スケールも同時に）
画像ソフト上で画像サイズを調整・・・スケール・基準杭等で適切なサイズ（１／100程度）に拡大・縮小
画像ソフト上で画像を回転・・・建物が正位置になるように微調整する
表計算ソフトで計算用ファイルを作成しておく
（計算用フォームの例）

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
1	建物番号等	南北長(cm)	東西長(cm)	設計尺数値(cm)	南北尺数	東西尺数	南北長設計値(cm)	東西長設計値(cm)	南北長整合度	東西長整合度
2	SB○			a	(n)	(n)	[D2＊E2]	[D2＊F2]	[(B2－G2)/B2]	[(C2－H2)/C2]
3	SB△			b	(n)	(n)	[D3＊E3]	[D3＊F3]	[(B3－G3)/B3]	[(C3－H3)/C3]
4	○△間			c	(5n)	(5n)	[D4＊E4]	[D4＊F4]	[(B4－G4)/B4]	[(C4－H4)/C4]

網掛けセルに手入力する。各整合度（I･J２～４）が０に近づくように網掛けセルの入力値を調整する。

建物設計尺数値（a）の割り出し
　画像上に長方形（建物○復元線）を引き、建物に合わせる
　長方形の２辺の長さをＢ２／Ｃ２に入力し、Ｄ２にａの値を入力し辺の尺数（自然数）をＥ２／Ｆ２に入力する
　画像上の長方形の大きさ・位置、フォーム中のａの値・尺数を変更し、整合度（I･J２）が０に近づくように微調整する
副屋設計尺（b）の割り出し・・・（a）と同様

建物間隔（配置）設計尺（c）の割り出し
　主屋辺（中軸線）と副屋辺、間隔が５尺の倍数値の近似値になるところを探す。
　ｃの値を求める。

フォーム上でa=b=cとなるように尺値・尺数、画像ファイル上で復元線位置等を調整する
完成した画像ファイルに正方眼枠を重ねて保存
計算ファイルを保存

付　記

提出後に気付いた例である小松市八幡遺跡（文献12）SB29（22×16尺）・SB30（19.5×16.5尺）（1尺≒29.40cm）からなる建物群に関連して一言。筆者は「整数」尺での建物復元を念頭に置いていたために、設計尺値の共通解が得られずにいたこの2つの建物について実は配置企画の検討に至らずにいた。ところが上記文献11等で建物規模(桁行・梁行総長)が5寸単位で復元されていることを知り、上記の建物規模と尺値にて検討してみたところ、あっさりと仮説H検証例と見做し得た。また、建物規模復元において尺よりも小さい単位を許容することによって、「建築単位」論（文献13）との接点を見出し得る例が少なくないように思われる。今後、個々の古代建物の設計復元について0.5尺単位で臨みたいと私は考えている。

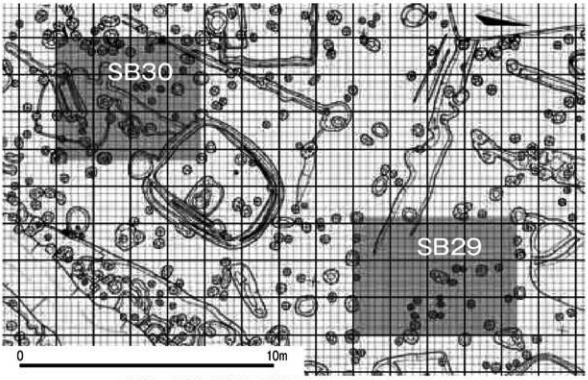
12　（社）石川県埋蔵文化財保存協会『八幡遺跡Ⅰ』1998年

13　室伏徹「奈良・平安時代建築解析法としての建築単位の提言」（帝京大学山梨文化財研究所編『掘立柱・礎石建物建築の考古学資料集』2006年）

「建築単位」とは、「桁行総長と梁行総長の比が例えば、4：3である場合、桁行総長が4×M、梁行総長が3×Mとなる基数Mが求められる」が、そのような「M値を、曲尺（法定尺）に換算した値」のことであり、「メートル表記のままでも良い」。室伏氏は次のように掘立柱建築を解析・表記する。

［側柱・総柱］（建築単位）［桁行単位数／桁行柱間数］×［梁行単位数／梁行柱間数］（＋廂間係値）

上記建物についての描案による建築単位表記は、SB29：側柱（2.0）11／3×8／3、SB30：側柱（1.5）13／3×11／3、（）内が「建築単位」、ただし曲尺（1尺≒30.3cm）ではなく上記尺値による）であり、この2棟の建築単位は異なることになる。しかし例えば尺値とSB30の規模推定を現状で据え置いたままSB29を22.5×16.5尺とみることができれば、SB29：側柱（1.5）15／3×11／3となり、2つの建物の建築単位はともに1.5尺となる。図中SB29の復元線を北辺と西辺についてそれぞれ0.5尺拡げることがそれほど不適切な資料解釈であるとも思われない。この場合、両方の建物の長短辺について「○.5」尺と規模を推定することになる。



付記図　小松市八幡遺跡の建物群（5尺／1尺方眼　1尺≒29.40cm）

石川県埋蔵文化財情報
第24号

発行日　2010(平成22)年9月30日

発行　財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477　FAX 076-229-3731

URL　http://www.ishikawa-maibun.or.jp/
E-mail address　mail@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　株式会社 橋本確文堂

© ㈶石川県埋蔵文化財センター